

# 3.11



東日本大震災

## 宮城県建設業協会の闘い 6

未来をつなぐ地域建設業





# 311

● 東日本大震災

## 宮城県建設業協会の闘い 6

未来をつなぐ地域建設業





寡黙によいものをつくること

使命だと思ってきた。

だが、東日本大震災を経験してわかった。

地域建設業のミッションはそれだけでない。

橋を架けて県土をつなぐ。

安全を守り日常をつなぐ

地域の笑顔をつなぐ。

子どもたちの未来をつなぐ。

女性とICTをつなぐ。

情報通信技術

役割を社会につなぐ。

俺たちにはつなぐ力がある。

土地のかさ上げや復興住宅の整備も進み

まちの形はできつつある。

だが、ちょっと目を転じると

荒れたままの土地が。

その分だけ人口が流出し、

にぎわいを取り戻せていない。

復興を遂げる日はくるのか。

でも、俺たちはあきらめない。

未来をつなぐ

地域建設業の力を信じて。



東日本大震災より7年、宮城県震災復興計画10年の終盤となる「発展期(3年)」へと移行し、官民の総力を挙げた取り組みにより、着実に復興への歩みを進めており、フルマラソン公認コースとなった「東北・みやぎ復興マ

ラソン」等の各種復興イベントが開催される一方で、施工の最盛期が依然として続いており、復興へはまだ道半ばの状況で、一日も早い復興と被災者の生活再建が望まれていると

## 大震災を風化させることなく、 教訓を伝えるための活動の展開と 情報を発信していくことが 当協会の役割である

ラソン」等の各種復興イベントが開催される一方で、施工の最盛期が依然として続いており、復興へはまだ道半ばの状況で、一日も早い復興と被災者の生活再建が望まれていると

近年、異常気象等による激甚化・局地化する災害等が頻発、地震、台風、ゲリラ豪雨、豪雪や火山噴火等の発生が、各地に甚大な被害をもたらし、宮城県内でも初めて昨年3月に栗原市の家きんにおいて「高病原性鳥インフルエンザ感染」による防疫措置がとられたことから、当協会組織としてその埋却作業等に出勤し、72時間での防疫措置完了へのミッションを遂行する等、災害時等に真っ先に駆けつける地域の「町医者」的に活動する重要な役割を担っております。

特に、今回の家畜伝染病における感染拡大防止や蔵王噴火への備え等、これまで経験したことのない災害に対し、災害基本法に基づく宮城県の「指定地方公共機関」として、大きな役割・責任を強く認識しております。

また、少子高齢化を背景に労働力人口が減

発刊のあいさつ

一般社団法人 宮城県建設業協会

会長 千葉 嘉春



改善への取り組みが求められております。当協会と致しましても、東日本大震災からの早期「創造的復興」に総力を結集し取り組むとともに、今後も地域の安全・安心で快適な暮らしを支える「町医者」が継続できるよう将来の担い手の確保・育成に向けたこれらの活動に真摯に取り組んで参る所存であります。

着々と進む復興において、離島・大島と本土を結ぶ「気仙沼大島大橋」架設や「命の道」となった三陸縦貫自動車道の延伸等、震災から7年の復興の現状を「未来をつなぐ地域建設業」をテーマとして、このたび震災記録誌第6弾を発刊致しました。

この大震災を風化させることなく、教訓を伝えるための活動の展開と情報を発信していくことが当協会の役割であることを強く認識し、真の宮城県の復興の姿が見えるまで記録誌を発刊して参りたいと考えております。

最後になりますが、記録誌の作成にあたりご協力を頂きました関係各位に対しまして厚く感謝を申し上げ、あいさついたします。

## 発刊に寄せて

宮城県建設業協会並びに会員の皆様には、東日本大震災発災直後の応急復旧活動から、現在、最盛期を迎えている復旧・復興工事をはじめとする社会基盤の整備及び維持管理に至るまで、多大なる御支援、御協力を賜り厚く御礼申し上げます。また、昨年3月に本県で発生した高病原性鳥インフルエンザへの対応におきましては、過酷で困難な防疫作業に尽力され、特定家畜伝染病防疫指針に基づく感染拡大防止への多大な御貢献に深く感謝申し上げます。

さて、昨年は、三陸縦貫自動車道の歌津IC(インターチェンジ)までの延伸や気仙沼市立病院の新病院開院など、震災からの復興が着実に進み、商用水素ステーションの開設や新ブランド米「だて正夢」のプレデビューなど「創造的な復興」に向け取り組んできた成果が形となって現れた年でした。また、全国和牛能力共進会宮城大会では宮城の代表牛が「第2区」で堂々の一位に輝き、仙台牛の品質の高さを日本全国へアピールすることができました。

今年は、「宮城県震災復興計画」の総仕上げとなる「発展期」(3年間)の最初の年

宮城県知事 村井 嘉浩



になります。「震災復興の総仕上げ」「地域経済の更なる成長」「安心していきいきと暮らせる宮城の実現」「美しく安全なまちづくり」を政策推進の基本として、復旧・復興に向けた施策に最優先で取り組むとともに、未来を担う子どもたちへの支援や人口減少対策など地方創生の取組も併せて推進してまいります。

震災から間もなく7年が経過します。震災前の状態に戻す「復旧」にとどまらない「創造的な復興」をさらに進め、一人一人が輝く、元気な宮城を県民の皆様とともに築き上げてまいりたいと考えております。

今回が第6弾となる本震災記録誌は、地域の守り手として重要な役割を担っている建設業の皆様の姿を映すとともに、大震災の教訓を継承しながら、貴協会と行政との連携のもとに、着実に進捗する本県の復旧・復興の状況を未来に向けて発信する情報誌であり、大いに活用されることを期待しております。

結びに、貴協会のますますの御発展を祈念いたしまして、発刊に寄せてのあいさついたします。



# 一般社団法人 宮城県建設業協会

昭和20(1945)年3月に日本建設工業統制組合宮城県支部として設置し、昭和24(1949)年1月に宮城県建設業協会が改組・創立。宮城県に本社を有する約260社の地域建設業で構成される。協会本部を仙台市青葉区に置き、沿岸部に面する5支部、内陸部の4支部の計9支部で組織される。平成25(2013)年4月から一般社団法人に。平成31(2019)年1月には70周年を迎える。

## 活動内容

国や宮城県、NEXCO東日本等との「大規模災害時における応急対策業務」、口蹄疫や鳥インフルエンザへの対応としての「家畜伝染病の発生時における緊急対策業務」に関する協定等を締結し、有事の際の危機管理産業として、地域並びに住民の安全・安心で快適な暮らしを支える活動を展開している。

平成15(2003)年「宮城県北部連続地震」、平成20(2008)年「岩手・宮城内陸地震」、平成23(2011)年「東日本大震災」、平成26(2014)年「豪雪」をはじめ、災害時にはそれら協定にもとづき、各機関の要請を受け、あるいは自主的にいち早く現場に駆けつけ、早期応急復旧に向けた対応等について組織を挙げた活動を展開している。

そうした献身的な取り組みが評価され、平成26(2014)年3月には、宮城県から災害対策基本法に基づく「指定地方公共機関」の指定を受けた。平成29(2017)年3月には宮城県内の家さんにおいて初めて「高病原性鳥インフルエンザ感染」が発生し、72時間内での防疫措置における埋却等にも対応。協会で策定する防災計画に基づき、定期的な実地訓練等とともに体制整備の強化を図り、これまで以上に地域建設業として、協会組織として、地域及び住民の安全・安心で快適な暮らしの実現に寄与するとともに、東日本大震災からの1日も早い「創造的復興」が遂げられるよう総力を挙げて取り組んでいる。



## 東日本大震災対応

直ちに協会本部に災害対策本部を設置。県内9支部のうち、津波被害を受けた沿岸3支部には連絡が付かなかったが、会員企業は自ら被災しながらも被災現場に駆けつけ、道路啓開を開始していた。「俺たちが地域を守る」という使命感から、協会の総力を挙げて、遺体搜索や燃料・食料・衣服の提供、さらには遺体の仮埋葬、腐敗した水産加工物の処理まで、あらゆる要請に応えた。

緊急対応が終わると、崩壊したインフラや建物

の復旧・復興事業が待ち受けていたが、事業量が膨大だったため、施工までの調整・計画が整わず手待ちが長期化。人員も資材も大変窮屈な中、現場技術者は厳しい条件の下で懸命に闘い続け、協会本部も課題に直面する度に関係機関に要望活動を行うなどの後方支援を重ねてきた。1日も早い生活再建とともに復興を望む地域の声に応えようと、現在も闘い続けている。



発刊のあいさつ 一般社団法人 宮城県建設業協会会長 千葉嘉春 ..... 4  
 発刊に寄せて 宮城県知事 村井嘉浩 ..... 5  
 宮城県建設業協会の概要と活動 ..... 6  
 東日本大震災の概要 ..... 10  
 グラビア ..... 12

ミッション1 **橋を架けて県土をつなぐ**（気仙沼大島大橋の架橋） ..... 18  
     小松亀雄 氏（丸沖建設） ..... 24  
     佐々木宏明 氏（橋本店） ..... 28  
     気仙沼で震災に遭遇しふるさとの復興支援に力を注ぐ  
     伊達みきお 氏 富澤たけし 氏（サンドウィッチマン） ..... 32

ミッション2 **安全を守り日常をつなぐ**（三陸道の深夜の緊急対応、  
 鳥インフルエンザ感染による防疫措置） ..... 35  
     「南三陸さんさん商店街」に  
     店舗を再建した山内正浩 氏（菓房山清） ..... 38  
     横山哲朗 氏（小野良組） ..... 42  
     高橋隆 氏（高橋工務店） ..... 48  
     上田徹 氏（宮城県建設業協会栗原支部長 上田建設） ..... 51

ミッション3 **地域の笑顔をつなぐ**（東北・みやぎ復興マラソン、  
 イラスト付き距離看板の設置、みんなでつくる3Aの防災林の植樹） ..... 52  
     「東北・みやぎ復興マラソン」を主催した後藤誠市 氏（仙台放送） ..... 58  
     平形徹 氏（熱海建設） ..... 61  
     渡邊大作 氏（渡辺サービスセンター） ..... 62

ミッション4 **子どもたちの未来をつなぐ**（小学生向け親子現場見学会、  
 宮城県農業高校の新校舎） ..... 70  
     深松努 氏（深松組） ..... 72  
     佐藤充 氏（小野良組） ..... 76  
     米倉勇也 氏（小野良組） ..... 77  
     ようやく仮設校舎から新校舎へと移る  
     佐藤淳 氏（宮城県農業高校） ..... 80  
     今野旭 氏（奥田建設 宮城県農業高校卒） ..... 82

ミッション5 **女性とICTをつなぐ**（宮城建設女性の会2015がICT勉強会） ..... 86  
     武山利子 氏（宮城建設女性の会2015会長 武山興業） ..... 88  
     松元花歩 氏（日広建設） ..... 92

ミッション6 **役割を社会につなぐ** ..... 95  
     対談  
     一力雅彦 氏（河北新報社社長）VS 千葉嘉春 氏（宮城県建設業協会会長）

資料編 ..... 104  
     宮城県の予算の推移 ..... 104  
     宮城県への復興交付金の交付可能額 ..... 104  
     宮城県内自治体への復興交付金の交付可能額 ..... 105  
     宮城県の公共土木施設の復旧工事の進捗状況 ..... 106



# M9.0

高さ

# 18.4m

## 東日本大震災

2011年3月11日午後2時46分

震源は三陸沖(牡鹿半島の東南東130km付近)

マグニチュード9.0(宮城県北部で最大震度7)

津波浸水高は最大18.4m(女川町)

宮城県内の浸水面積は327km<sup>2</sup>





気仙沼市



南三陸町



名取市

被災者のための復興住宅も各地域で完成してきた。上から、気仙沼市の幸町住宅、南三陸町の志津川東復興住宅、名取市の関上中央団地。

# 進む復興



南三陸町

2017年9月に高台に移転した南三陸町の新庁舎。旧庁舎は防災対策庁舎に隣接していたが津波で流出し、ずっと仮設庁舎で執務していた。



# 残る震災の爪痕



石巻市

石巻市の日和山から見た新門脇地区。新たなまちづくりが進み、復興住宅も整備されたが、甚大な津波被害を受けた場所だ。



石巻市



岩沼市



名取市

震災の爪痕が残されたままの土地はいたるところに。上から、震災復興のシンボルとなる公園整備が予定されている石巻市の中瀬地区、仙台空港に近い岩沼市の相野釜地区、名取市の日和山のふもとから見た関土地区。





石巻市



名取市



南三陸町

復興工事は宮城県内の各地域で続いている。上から、石巻市の旧北上川河口付近、名取市の関上地区、南三陸町の防災対策庁舎付近。

# 続く復興工事



気仙沼市

かつて大型漁船「第18共徳丸」が乗り上げていた気仙沼市の鹿折地区では、土地のかさ上げが終わり、まちの形が見え始めたものの復興工事が真っ盛りだ。



ミッション1 橋を架けて県土をつなぐ

# 気仙沼湾に 巨大な橋と クレーン船

2017年3月29日に  
気仙沼大島大橋の架設工事が行われた。  
作業は前日深夜からスタート。  
夜明け前の気仙沼湾に  
巨大な橋とクレーン船の姿が  
浮かび上がった。





# クレーン船で吊り上げ えい航

気仙沼の朝日埠頭で  
地組みされた橋(中央径間)は、  
長さ228メートル、重さ約2,700トン。  
クレーン船で吊り上げ、  
早朝6時15分から  
架設地点までえい航した。



約2,700トンもの中央径間を吊り上げ、朝日埠頭から架設地点である大島瀬戸までえい航した(2017年3月29日)。



三重県の工場で製作した部材を気仙沼に運び、中央径間を地面の上で組み立てた(2016年11月)。



# 本土と大島が つながった

架設地点に  
えい航された橋（中央径間）は、  
ゆっくりと慎重に側径間と接合。  
12時30分に架設作業は完了し、  
本土と大島がつながった。  
地域の長年の夢が叶った瞬間だ。



気仙沼大島大橋ができて、  
島内もだいぶ変わってくと思う。  
長年にわたり、  
大島に橋を架けてもらおうと  
協議会を立ち上げ、陳情してきたが、  
やっともものになった。  
すぐに病院に行けるようになる。  
島の復興にも橋が大きな役割を果たすと思う。

## 小松 亀雄 氏

丸沖建設（気仙沼市）

丸沖建設会長。40数年前に漁業をやめて丸沖建設創業。大初平地区行政委員、自治会長をはじめ、大島内のさまざまな役職を務める。震災後、津波ですべてを失い、どう生計を立てるかを相談にきた島民を励まし、衣類などをわけてやったりしたという。大島生まれ。



## 津波と火事

大島には建設会社が3社あり、3社とその他の業者でつくった大島防災検討委員会が防災協定を結んでいる。何かあれば気仙沼市大島出張所に集まることになっている。東日本大震災が発生した時もすぐに大島出張所に向かい、人命救助やライフラインの確保に動き始めた。

津波が島を二つに分けるように通り抜け、海に飲み込まれた。飲み込まれなかったものは、元の場所でないところに残されていた。大島小学校の体育館、大島開発総合センター、崎浜保育所に避難所が開設された。委員会のメンバーで発電機を持ち寄り、灯りを確保した。あの夜は寒かった。アイスバーンにならないよう、朝2時30分ころから融雪作業を行い、道路を使えるようにした。市内内湾で、倒壊した石油の大型貯蔵タンクの油に引火し、爆発した火が気仙沼湾に浮かんだがれきに燃え移り、大島

の北側へ延焼した。本土からは大島全体が燃えたように見えたはずだ。

火事が大島の北側から亀山の頂上を超えて延焼してきた。南側に燃え広がれば島全域が飲み込まれ、逃げ場はない。参加できる島民が総出で消火にあたったが、防水タンクの水はすぐになくなり、水が足りない。当社等に生コンクリートを運ぶアジテータートラック（生コン車）があったので、何度も海水を運んでは消防隊に供給した。延焼が広がりつつある時に、みんなで協力し、津波が二分し超えていった場所に散乱していた車やがれきをよけて防火帯をつくり、何とか延焼を防いだ。消し止めるまでに数日かかった。アジテータートラックがなかったらどうなったことか。「自衛隊が救助にくるので荷物をまとめて集まれ」という間違っ



大島には橋がなく、港から船で行き来する以外に交通手段はなかった（2017年11月）。

沖に避難して津波を免れていた「ひまわり」の船長が無料で支援物資などを運んでくれた。

## 生命線

大島には橋がなく、船で行き来する以外に交通手段はない。自衛隊の沖縄所属の船が、最初は大島の大初平の荒砥浜に入ってきた。私は大初平地区の行政委員と自治会長を務めていた。「支援物資が届くので、これから陸揚げをする」と連絡が入り、すぐに現地に向かった。届いた燃料や飲料水、食糧などを大島出張所の対策本部へ運んだ。みんなで分け合ったが足りる量ではなく、それぞれが自宅に蓄えていた食糧などを持ち寄ってしのいだ。

その後、徐々に支援物資が入ってくるようになったのだが、大島の臨時船「ひまわり」が生命線だった。

## 気仙沼大島大橋

これから気仙沼大島大橋ができて、島内もだいぶ変わってくと思う。長年にわたり、大島に橋を架けてもらおうと協議会を立ち上げ、陳情してきたが、やっともものになった。これまでは病人が出て救急車がきて、大島から救急艇で本土に運び、さらに救急車で病院まで搬送していたが、すぐに病院に行けるようになる。

島の復興にも橋が大きな役割を果たすと思う。現



橋でつながった大島。開通すれば島の復興への役割も期待される（2017年11月）。



在は、強風や濃霧が発生すると船を出せないが、捕った水産物をいつでも市場に運ぶことができる。観光への期待も大きい。民宿もほとんどが流されたが、だいふ復興してきた。大島は波が静かで水もきれいで、海水浴には最適だ。

ただ、島内の道路がまだしっかり整備されてい

## 島の建設業

大島で建設業を営むには仕事量が少ない。かつては船を買って改造し、資材を自ら運搬してベルトコンベアで揚げていたので、生き残ることができた。だが、カーフェリーができてからは、資材をトラックに積んで運べるようになり、本土からも建設会社がくるようになった。それでも本土の会社がカーフェリーで通う朝夕の時間に、その分長く仕事ができる地元のメリットがあったので、何とかやってきたが、震災後はいろいろな建設会社が島外からきている。

本土で仕事をすることもあるが、島から通うので採算ベースに乗せるのが難しかった。だが、橋ができれば状況は変わる。これからは技術者の育成が課題だ。当社にも若い社員はいる。震災で仕事を失った島の人たちだ。復興が終わったら会社を辞めるのかと思っていたら、今後がんばりたいという。機械や車両など、現場で仕事をする上で必要な資格は既に取りらせている。現場で働く作業員の育成はできたので、現場を管理する技術者を育てたい。

い。橋ができてたくさんのお客さんが入ってきた時に詰まってしまう。また、海岸の荷揚げ場などの施設も早く復興させ、生産した水産物をすぐに水揚げできるようにしてほしい。橋ができれば、これまで以上に水産物の販売に有利になる。



津波で分断された道路（上）。丸沖建設が復旧工事を手掛けた（下）。

## 笑顔

島のみんなにも笑顔が出て、冗談もいえるようになってきた。土地を造成して家を建て、家族が仙台や東京から戻ってきたからだ。家族がバラバラになり、島に残されたのは祖父や祖母だけだったが、家族が戻って後継者ができたところも増えてきた。

気仙沼大島大橋の架橋も大きい。家族が島に戻る決断にもつながるし、お嫁さん対策にもなる。これまでは孤島なので、お嫁さんもなかなかきてくれなかった。お嫁さんがくれば島の後継者も増える。大島は暮らしやすいところだ。

（インタビューは2017年11月15日）



つながった橋の上では、2019年春の完成に向け工事が続いている（2017年9月）。



大島と本土が一直線に結ばれる（2017年9月）。

# 2019年春の完成へ

気仙沼大島大橋の愛称は「鶴亀大橋」。

2019年春の完成に向けて、

つながった橋の上では

舗装工事や

橋のライフラインの

設置工事が進む。





当社のシンボルマークは  
「空を飛ぶクジラ」だ。  
「未知の空間に、  
地域の抱えている夢を叶えてやろう」  
という願いがある。  
気仙沼大島大橋の架橋事業は、  
まさに大島地域、気仙沼地域の人たちの  
夢を叶える事業だった。

## 佐々木 宏明 氏

橋本店（仙台市）

橋本店社長。「空を飛ぶクジラ」のシンボルマークも自らが発案した。クジラの祖先は陸上で生活していたといわれる。「時代に合わせて進化し、空を飛ぶ発想を持とう」と話し、震災後を見据えた会社の変化を模索する。大崎市出身。



## レジリエンス認証

震災が発生した時、私が最も感じたのは、本社機能が失われた時にどうするかだ。BCP（事業継続計画）の一環として、震災直前に高砂サポートセンター（仙台市宮城野区）を立ち上げていたが、さらに充実が必要だと考えた。設備投資をして2014年12月に「テクノロジー・マネジメントセンター」を完成させ、災害時に本社機能が失われても対応できるようにした。大規模駐車場や宿泊施設もあり、センターの大講堂には地域の人々が避難できる。食糧も備蓄しているので、ある程度の期間は対応できる。もう一つの問題がパソコンだ。サーバーが本社にあったので、機能しなくなることも想定される。クラウド化して、将来のビッグ



テクノロジー・マネジメントセンターの外観（2017年3月）。

データにも対応できる体制にした。

その結果、国の国土強靱化施策の一環として、災害に強い会社と与えられる「レジリエンス認証」を得ることができた。「10キロ離れた地点に本社と同等機能を果たせる施設があること」という条件があり、「テクノロジー・マネジメントセンター」が該当した。

## 未知の空間に 地域の抱えている夢を

当社のシンボルマークは「空を飛ぶクジラ」だ。タイトルは「夢、かぎりなく」。「未知の空間に、地域の抱えている夢を叶えてやろう」という願いがある。気仙沼大島大橋の架橋事業は、まさに大島地域、気仙沼地域の人たちの夢を叶える事業だった。上部工と下部工が一括発注され、下部工を当社と東日本コンクリートが担当することになった。

大島は離島なので、建設資材や作業員を船で輸送しなければならない。時間的、工期的リスクがあったので、大島では震災で被災した旅館を当社で改修し、宿舎とした。本土側では、岩手県一関市に宿舎をつくった。工事が終わった後、大島の宿舎は無償で旅館経営者に引き渡した。

大島には、何かあった時の命の道として橋と道路



気仙沼大島大橋の架設作業（2017年3月29日）。

が必要だ。橋が架かれれば地域の生活環境が向上するとともに、観光需要を増やし、経済効果を引き出すことにも貢献する。受注から約4年が経過し、2017年3月によりやく橋梁本体の架設を迎えることができた。

## 創立140年

当社は2018年4月に創立140年を迎える。地域に恩返しをしようと、被災地域に復興のシンボルとして、1万4000本の桜の苗木を無償で提供するプロジェクトを進めている。大島では2016年11月3日に地域の人を集め、植樹会と芋煮会を行った。大島特有の御衣黄桜を50本植樹した。黄色い桜が咲く。芋煮会には私も参加したが、地域

に密着して仕事をするのが建設業の原点だ。常に地域を見つめながら一緒になって復興し、みんなの願いを叶える一役を担えればよいと思う。



大島で地域の方と植樹会と芋煮会を行った（2016年11月3日）。



## 伝統を継ぐとは 信用を継ぐこと

当社は139年の歴史があり、「伝統を継ぐとは信用を継ぐこと」だ。東京で仕事をしていたころには関東大震災も経験した。当時も復興にかかわった経験がDNAとして残っている。災害協定を結んでいるからではなく、建設業が果たすべき分をわきまえ、災害時にしっかり役割を果たすのが当社のDNAだ。

当社の完成工事高は震災後に平均2.5倍になった。復興工事がなくなればマーケットは縮小するだろう。新たな挑戦として重点を置いて取り組んでいるのが、民間の商業施設の開発や再開発事業だ。自分

## 橋本マイスター 認定制度

働き方改革ということで、現場の週休二日制を定着させる取り組みも進めている。協力業者を含め、目標を持って何をやるかを見える化するため、行動計画を定めた。工期が決まっている震災復興工事を除き、2021年3月31日までに現場の週休二日制を実現する。宮城県建設業協会を通じて役所への陳情も行っているが、最も大切なのは現場技術者意識の改革と効率化だ。準備工事や片付け工事は除き、本体工事に着手している期間のみ、監理技術者がいればよいという形にしてもらえれば、現在の人員でも効率よい施工ができる。

担い手確保に向けては、新入社員の初任給を大手ゼネコン並みに引き上げた。また、当社には女性技術者が3名いるのだが、全現場で女性が働きやすい

## ひと味違うものを

地域建設業は分をわきまえて仕事をするのが大切だ。しっかり棲み分けをして、大手がやるような仕事は地域でJVを組んで対応したい。「橋本店はひと味違うよな」というものを残したい。顔と名前と技量がわかる協力会社とタッグを組んで、よい仕事をしていきたい。

(インタビューは2017年10月27日)

たちが企画し、いろいろな業種と組んで事業を受注していく。また、民間の知恵や資金を活用するPPP(官民連携)も進めていきたい。国や自治体の一定規模以上の大型プロジェクトは、PPPの採用を優先的に検討することになっている。民間ノウハウを持ったデベロッパーや金融機関と組んでビジネスチャンスを狙っていきたい。



橋本マイスターの認定式。金色のヘルメットがマイスターの証となる(2017年6月)。

トイレや更衣室を整備している。下請けの女性技能者も働きやすくなる。技能者の処遇改善に向けては、「橋本マイスター認定制度」をつくった。優秀な技能者を認定して日給を割増して本人の自覚を促し、技能の継承を図っている。

また、当社の定年は60歳だが、再雇用で70歳まで働ける環境づくりもしている。今後は公共投資も縮小していくだろうが、優秀な技術があれば働ける環境を整備できれば、70歳まで消費活動が続けることができ、税金として公共事業に返ってくる。



美しい橋が架かり、  
気仙沼湾に新たな景観が加わった(2017年11月)。



フェリーから橋へと、大島に渡る手段は大きく変わることだろう(2017年11月)。

# 本土へ すぐに 行けるように

船以外に交通手段がなかったために、  
さまざまな苦勞をしてきた。  
震災時には孤立して、  
津波と火災に悩まされた。  
長年の夢だった橋が供用されれば  
車で本土へすぐに行けるようになる。



朝8時過ぎにフェリーから下りてくる人たち(2017年11月)。



## 沖から押し寄せる津波や 燃え広がる気仙沼のまちを 眺めていた

——震災当日の状況を教えてください。

伊達 仙台でやっている番組のロケ中に、気仙沼のシャークミュージアムのあたりで地震がきた。スタッフの指示ですぐに安波山<sup>あんばさん</sup>に逃げた。午前中に安波山で番組のオープニングを撮影し、「気仙沼が一望できるね」などと話をしていた。気仙沼の地理がわからず、高台は安波山しか知らなかった。夜の8時半くらいまで山を下りることができず、沖から押し寄せる津波や燃え広がる気仙沼のまちを眺めていた。恐ろしかった。

富澤 土地勘がなかったのも、この山は大丈夫なのか、どこに逃げれば正解なのかがわからなかった。周りの情報も入ってこないのも、最初は気仙沼だけが被災しているのかと思った。

——気仙沼で震災を目の当たりにしたことは、大きなできごとでしたか。

伊達 気仙沼はほとんど訪れない場所だったが、偶然にも気仙沼の海沿いで被災した。そういう意味では縁のある場所になった。東京に戻ったのは2～3日後だ。

——2人とも宮城県出身です。東京に戻る時の思いは。

伊達 「仕事をしていてよいのか」という感じだった。ライフラインがすべて止まった地元を後にして、東京に帰ってよいのかと思った。

## ボランティアのようなことはできない。 東京でできるのは お金を集めることだった

——東京ですぐに義援金を募る基金を立ち上げましたね。

伊達 被災地ではすぐにお金が必要になる。「何かしなければならぬ。お金を募ることが優先だ」と考えた。口座をつくってみんなに協力してもらった。すぐに被災地に行って、ボランティアのようなことはできない。東京でできるのはお金を集めることだった。

——かなりの義援金が集まったと聞きました。

伊達 お金を募って2カ月足らずで3億円近くが集まった。我々の同業者の先輩やプロ野球選手、さらに

は全国の方々から結構な額を振り込んでいただいた。すごくありがたかった。

——その後、すぐに気仙沼に戻っています。お二人の意思でロケ地を気仙沼に変更したと聞きました。

伊達 そうだった。被災地の状況を伝える番組で行った。3月24日から25日だ。

富澤 (気仙沼の)現状がどうなっているのか。何かできるかと思っで行ったが、何もできなかった。

伊達 救援物資を買って行っただが、足りない。どこにどう渡したらよいかもわからなかった。震災直後は、家族が無事で家もある方も避難所にいた。そういう方は(我々が行くと)喜んでくれたが、当時は行方不明の方も多く、家を流された方もたくさんいた。人それぞれ状況が違う。全く笑ってくれない方もいた。

## バスツアーも続けている。 みんなが 楽しんでくれて 大人の修学旅行みたいだ

——これまでどのような復興支援活動をしてきましたか。

伊達 何組かを募って(お笑いの)チャリティーライブは行ってきた。岩手県の大船渡市が最初だ。約700人が集まってくれた。

富澤 バスツアーも続けている。全国から人を集め、バスで被災地や美味しい(食べ物のある)ところを僕らと一緒に回ってもらう。みんなが楽しんでくれて、大人の修学旅行みたいだ。震災を伝える語り部の話を聞くと、みんなが泣く。個人的にまた、被災地を訪れてくれるきっかけになればいい。

——震災から間もなく7年になりましたが、現在の復興の状況をどう見えていますか。

伊達 地域によって復興の早い、遅いが出てきている。気分も新たにまちをつくるんだというところもあれば、暗いままで人がいなくなっただけのまちもある。一方で、県外からボランティアできて、被災地の人柄や環境、美味しい食べ物が気に入り、移住してまちを復活させようとしている人たちが目立っている。

富澤 早いとか遅いとか、比べるものがないのでスピードがわからない。でも、今でも被災地に行くと

一生懸命に(復興に向けて)作業をしてくれている。「ありがたいな」とは思う。

——東北・みやぎ復興マラソンでは、現地からの中継を担当されました。どんな印象でしたか。

伊達 まずは、続けていかなければならない大会だ。気持ちよく海沿いを走っている方が多かった。あんなにたくさんの方がきてくれて、最高のマラソン日和だった。地域の方も沿道から「きてくれてありがとう」と声を掛けていて、走った方が感動していた。

富澤 海外から参加した方も多くて驚いた。

## 地震に強い建物が どんどん出てきた。 日本は地震大国なので、 そこはしっかりやってほしい

——建設業に知り合いはいますか。

伊達 仙台商業高校のラグビー部で、私と富澤の間でスクラムの最前列を組んでいた先輩が建設業を営んでいる。うちのラグビー部は仲がよいので、今も連絡を取り合っているが、その先輩が職人の育成を進めている。大工さんは日本

# 気仙沼で震災に遭遇し ふるさとの復興支援に力を注ぐ

——伊達 みきお 氏 富澤 たけし 氏

サンドウィッチマン



東北・みやぎ復興マラソンでは現地からの中継を担当した(2017年10月1日)。





左が伊達みきお氏、右が富澤たけし氏。仙台商業高校のラグビー部で知り合い、コンビを結成して芸人の世界へ。2007年M-1グランプリ王者。みやぎ絆大使、東北楽天イーグルス応援大使なども務める。2人とも仙台市出身。

の伝統だ。木造住宅をつくる職人は格好いいし、その魅力を伝える活動をしている。

——建設業界に伝えたいことはありますか。

伊達 耐震設備の整った地震に強い建物がどんどん出てきた。日本は地震大国なので、そこはしっかりやってほしい。ただ、津波がきたら逃げるしかない。高台に家を建てるしかない。3.11（の経験）がすべてだ。地震の多い宮城県なので耐震性の高い家をつくっていると思うし、3.11の地震でも倒壊被害はほぼなかった。「さすが宮城だ」と思った。備えはしっかりしていた。

富澤 災害が発生する度に建物ができってくるが、「こんなにすごい早さでできるんだ」と感じた。ラグビーをやっていて、僕らはスクラムが弱かったのですぐつぶれた。ラグビー日本代表もがんばってスクラムが強くなったら、海外で通用するようになった。（建設業のみなさんにも）経験を経て、強い家や建物を建ててもらえればいいと思う。

**高台に移転して、さらにお客さんもきている。被災地のモデルになるまちだ**

——南三陸町のさんさん商店街にも

よく行かれているようですね。

伊達 南三陸町は、最初はマイナスイメージで名前が全国区になった。だが、そこから上手にボランティアを集め、復興も早くできた。さんさん商店街ほど盛り上がった仮設商店街はないのではないかと。高台に移転して、さらにお客さんもきている。被災地のモデルになるまちだ。隈研吾さんの設計で、素晴らしいデザインの商店街をつくった。南三陸町の庁舎も女川駅も格好いい。デザインで（まちが）変わるんだと思った。

**しっかりしたものをつくる。自信も持っているのだが、宣伝下手なところがある**

——義援金に「東北魂」という名前を付けています。お二人にとって「東北魂」とは何ですか。

伊達 へらへらせずにやることはやる。じつと耐えながら「つらい」といわず、ひた向きにやるという感じだ。

富澤 職人っぽい。ものはいわなくても、しっかりしたものをつくる。それについて自信も持っているのだが、宣伝下手なところがある。今回の震災で外部の人が入ってきて、「これすごくいいじゃないか」となった。関西人などは

上手なのだろうが、もっとうまく（地元のよいものを）外部に知らせてもらえれば。僕らもそういう活動をしていかなければならない。

伊達 「こんなに美味しいのに、なぜ、みんなにもっと食べてもらえないのか」と聞くと、「うちはいいのよ。ここ（地元）だけで（商売を）やるから」という。

富澤 震災で、（東北に）よいものがたくさんあるとあらためて知った。

伊達 志津川のタコもそうだ。かつては「西の明石、東の志津川」といわれていた。（石巻の）雄勝石もよい素材だ。東京でも高級なお店に行くと、雄勝石のお皿に料理が載っているが、それが雄勝石だと誰もいわない。上手に売っていけば南部鉄器のように世界で人気が出る。そういうPRをしていけばよいのだが、「うちはいいから」といわれてしまう。

富澤 そこがよいところでもあり、悪いところでもある。

伊達 それが東北なのかもしれないが、もう少し欲張ってもよいと思う。

（インタビューは2018年2月2日）



ミッション2 安全を守り日常をつなぐ

## 「南三陸さんさん商店街」がオープン



2017年3月3日、「南三陸さんさん商店街」がオープン。2012年2月に仮設商店街として開設されていたが、約8メートルかさ上げされた造成地に移転した。



オクトパス君は、志津川タコをモチーフにしたゆるキャラだ。志津川タコを使った名産品も。



南三陸杉を使った建物に28軒のお店が入る。



かさ上げた土地からは、奥に防災対策庁舎が見える。



# すべてを失い 店舗を再建

1枚の写真がある。

震災から2日目に

変わり果てた

南三陸町のまちを歩く

親子の写真だ。

地元で洋菓子店を営む

菓房山清の山内正浩さんと息子さんだ。

津波で店も工場も倉庫も自宅も失った。

6年が経過し

「南三陸さんさん商店街」に

店を構えた山内さんは、

どのように再建を果たしたのか。



再建した店舗の前で(2017年11月)。





## 店舗、工場、倉庫、自宅は すべて津波で流された

あの日、避難した小学校の校庭から壊滅していく南三陸のまちを家族で見つめていた。南三陸町五日町地区にあった店舗、工場、倉庫、自宅はすべて津波で流された。

すべてを失い、山越えをして隣町の親せきの家に身を寄せた。翌日、店や自宅がどうなっているのか、何か残っていないかを確認しようと、息子と2人で自宅付近を歩いた。このまま仕事を続けられるのか？息子は北海道の大学に進学が決まっていたが入学させられるか？盛岡の大学に行っている娘もこのまま在籍させられるか？

まだ、補助金などの国の支援も皆目検討が付かない時だ。途方に暮れたが、前に進まなければならない。

## 知り合いの菓子屋から 譲り受けたオーブンやミキサーを使い、 少しずつ商品を広げていった

携帯電話も通じず、社員の安否確認に約2週間かかった。正直、一度は廃業しようかと考えたが、「社長、もう一度やりましょうよ」という声が社員から挙がってきた。再開を決意し取引業者すべてに電話をかけ「もう一度挑戦してみたい。これまでの支払いを少し待ってほしい」と頼み込み、すべての業者から快諾を得た。

南三陸町には電気も水道もきていなかったの、登米市で工場を再開することにした。当初、社員の休業補償は3カ月間だけと聞いていたので無給の期間をつくらないう再開を急いだ。2011年7月末には「みやぎ生協加賀野店」の店舗内に仮工場をスタートさせ、知

# 「南三陸さんさん商店街」に 店舗を再建した

—— 山内 正浩 氏 菓房山清（南三陸町）社長



り合いの菓子屋から譲り受けたオーブンやミキサーを使い、少しずつ商品を広げていった。

震災時に働いていた社員はほぼ全員、会社に戻ってもらった。再開が早く、慣れた職人が戻ってきてくれたため回復は早かったが、資金面ではかなり苦労した。復興計画書を突き返された銀行もあったが、何とか政府系の金融機関から借入れを起こし、少しずつ仕事を広げていった。登米市の補助金や後の中小企業等グループ補助金にも助けられた。震災後、仕事を再開してから元日以外は一日も休むことなく仮工場から支店や取引先に商品を配送し、取引業者への返済は約10カ月で何とか終わることができた。

## 本 店や工場、 自宅があった場所だ。 「やっとここまでできたか」 という思いだった

2014年登米市に新工場を建設。2017年3月3日には、「南三陸さんさん商店街」がオープンし、テナントとして入ることができた。偶然だが、ちょうど10メートル下にかつての（かさ上げをする前の）本店や工場、自宅があった場所だ。「やっとここまでできたか」という思いだった。

さんさん商店街のオープン後は日も回る忙しさだった。駐車場には車があふれ、三陸自動車道の志津川インターチェンジから渋滞が続いた。お客さんは観光客が多いが、地元のお客さんも大事にしようと生ケーキを含め当店のフルアイテムをそろえている。地元のお客さんは混雑を避け、朝早くや夕方に来店してくれる。

## 震災前は 疲弊していたと思うが 地元建設業界の方々には 踏ん張ってもらいたい

三陸道が南三陸町まで開通し便利になった。仙台方面、登米市からのアクセスも向上し、さらに気仙沼市まで三陸道が繋がれば沿岸の動脈として機能するだろう。かつては国道45号、同398号の2本しか道路がなく、震災ではどちらも分断され南三陸町は陸の孤島になった。新たな幹線道路ができるのはよいことだ。

復興事業は規模が大きいため、中央の建設会社も多いだろうが、極力地元の建設会社に引き受けてもらえば地域にお金も回る。震災前は「コンクリートから人へ」といわれ、地域建設業は疲弊していたと思うが地元建設業界の方々には踏ん張ってもらいたい。

## 南三陸町にも 工場併設の店舗を構え、 「菓房山清 南三陸総本店」 として会社の本拠地に

息子は北海道の大学を4年間で卒業することができた。実は大学から、「入学金を免除し、授業料や当面の生活費も面倒をみるので、ぜひ、入学させてほしい」という話をいただいていた。大学を卒業して製菓学校に通った後、現在は札幌の洋菓子店で修行している。息子が後継を考えてくれなければ、新工場の建設も躊躇していたと思う。娘も盛岡の大学を無事卒業し歯科医師として働いている。

登記上の本社はまだ南三陸町だが、工場が移ったため登米市が本拠地ようになってしまった。地元の知り合いからは、「早く南三陸町に戻ってこい」といわれるが被災地では働き手が少なく、登米市の社員を技術者として育ててきたためすぐに登米市を離れるわけにもいかない。

だが、南三陸町は当社発祥の地。大正14年の創業で息子の時代に100周年を迎えるはずだ。いずれは南三陸町にも工場併設の店舗を構え、「菓房山清 南三陸総本店」として会社の本拠地にするのが夢だ。

（インタビューは2017年11月16日）



震災から2日目に途方に暮れながら歩いた場所を見下ろしながら（2017年11月）。



# オープン前日に 三陸道に異常が！

「南三陸さんさん商店街」に行くには、  
三陸自動車道の志津川インターチェンジで  
下りるのが早道だ。  
だが、商店街オープン前日に三陸道に異常が発生し、  
深夜に緊急対応に当たった人々がいることを  
知る者は少ない。  
生活の足であり、地域の生命線である  
道路を止めるわけにはいかない。  
当たり前の日常をつなぐのも  
地域建設業の役割だ。





イベントがあろうがなかろうが、  
道路は生活の足であり、  
生命線だ。

ましてや三陸道の志津川 IC 区間は  
開通して間もない。

旧道の国道 398 号があるにしても、  
止めるわけにはいかない。

## 横山 哲朗 氏

小野良組（気仙沼市）

小野良組土木部部长。車が好きで道路工事や機械に興味があり、建設業の道へ。自分が携わった道路、橋、造成場所が完成するとやりがいを感じるという。気仙沼市出身。気仙沼は復興事業が進んでも、水産都市なのでカツオとサンマの不漁が続くと元気が出ないと嘆く。



## 深夜の携帯電話

2017年3月2日の夜11時に携帯電話が鳴った。ちょうど布団に入ろうとしているところだった。宮城県建設業協会の伊藤博英専務理事からだ。「この時間に何だろう」。震災以降、台風や豪雨の際には伊藤専務理事から夜中の出動要請が入ったが、悪天候ではなかったので災害対応の要請は考えられない。「南三陸町の三陸自動車道の法面に<sup>のり</sup>変状があり、トンパックを積んでいるが重機が足りない。手配できないか」という要請だった。当社は、南三陸町から岩手県との県境まで、国道

## 緊急対応作業

私が現場に到着したのは午前0時ころだ。場所は、三陸道上り線の志津川インターチェンジ（IC）から仙台方面に向かって約1キロ地点だった。三陸道の両脇に切り立った法面<sup>のり</sup>の下から2段目、3段目くらいが一部滑っている状況だった。三陸道に土砂が崩れてくる恐れがある。ちょうど追い越し車線のある片側2車線区間だったので、走行車線を規制し、先に到着した丸本組（石巻市）と丸か建設（加美町）が、土砂が崩れても車道をふさがないようにトンパックを積んでいる状況だった。ただ、ユニック車（クレーン搭載型トラック）からトンパックを一つずつ下ろしていたので、作業効率が悪い。40～50メートルにわたってトンパックを設置する必要があったが、まだ、トンパックを20体設置していたかどうかというところだった。

現場を見て、変状だけで法面<sup>のり</sup>が崩れてはいなかったので一安心した。クレーン式のバックホウが入れば作業は進むだろう。すぐにバックホウが到着し、現場に

## 生命線

その日は、志津川ICの近くにある「南三陸さんさん商店街」のオープンだったが、頭にはなかった。オープンに気が付いたのは、土のうの据え直し作業をしている時だ。「やけに車が多いな」ということになった。

通行止めにもなれば、さんさん商店街のオープンイベントに向かう人たちに支障が出たかもしれな

45号の維持工事を担当している。何とかできるのではないか。「気仙沼市から重機を運ぶのでは大変なので、南三陸町の協力業者をあたってみる」ということで、いったん電話を切った。

すぐに国道45号の維持工事を担当している三浦成康・土木部工事課長に連絡し、南三陸町の協力業者に電話を入れてもらおうと「対応可能だ」という。ただ、現場の状況によっては重機だけでなく、ほかの車両や作業員が必要になる。確認するため、すぐに私も現場に向かった。



深夜にバックホウを手配し、三陸道の緊急対応作業を行った（2017年3月3日）。

いた国土交通省の担当者とも打ち合わせをしながら、0時15分には作業を開始した。トンパックの玉掛けや据付の誘導など、実際の作業は丸か建設にお願いした。1時間程度で緊急対応作業は終わり、午前2時にはいったん現場を離れた。追い越し車線は通行可能だった。

大きな土のうが用意できなかったので、丸本組が製作し、当社の協力業者の機械で据え直しを行うことになった。午前10時すぎから再び作業を行い、夕方5時くらいまでかかったはずだ。

いが、そうしたイベントがあろうがなかろうが、道路は生活の足であり、生命線だ。ましてや三陸道の志津川IC区間は開通して間もない。旧道の国道398号があるにしても、止めるわけにはいかない。当社は国道45号の維持管理の仕事をやらせてもらっている。今回はたまたま三陸道だったというだけの話だ。



当時、当社は南三陸町で国道45号の防災工事も担当していた。台風がくると波をかぶって通行できない区間があり、消波ブロックの製作・据付を行う工事だ。この現場に向かうため、私も南三陸町へと足を運ぶ機会がたびたびあり、志津川地区の交通渋滞の状況もわかっていた。そのころ三陸道は志津川ICが終点で、国道45号のさんさん商店街の予定地付近はいつも渋滞していた。復興事業の関係で内陸から通勤する車もあり、終点の志津川IC出口は毎朝、混雑していた。

2017年3月20日に南三陸海岸ICまで延伸したので渋滞も落ち着いたようだ。1区間伸びたことで、さんさん商店街に行くお客さんは便利になったはずだし、復興事業関係の車も楽になったと思う。志津川

地区の人にとっては待望の志津川ICだ。ようやく三陸道がわがまちにきたという感じだろう。



地域建設業の強みは、地元をよく知っていることだ。県道や市道がどこでどう接続しているかも把握している。特に震災の時は、国道45号の至るところに津波が遡上し、流された家屋が横たわっていたが、どこを通れば機能を維持できるかを把握しながら南三陸町までつなげた。

緊急の要請に対しても、迅速に対応できるのが地域建設業だ。今回の三陸道の緊急対応にしても、宮城県建設業協会本部からの連絡を受け、当社と丸か建設、丸本組がチームとして力を合わせて対応することができた。地域建設業のあるべき姿だと思う。

会社のある気仙沼市では、土地のかさ上げも概ね終了し、区画整理も終わって自宅の再建も進んできた。だが、国道45号にしても、県道にしてもかさ上げすべきところが残っているし、復興事業にかかわるダンプ・トラックの交通量は多い。復興終了期間といわれる10年間でめどが付くのだろうか。いくらかでも時期をずらさないよう、我々もがんばっていきたい。

(インタビューは2017年11月14日)



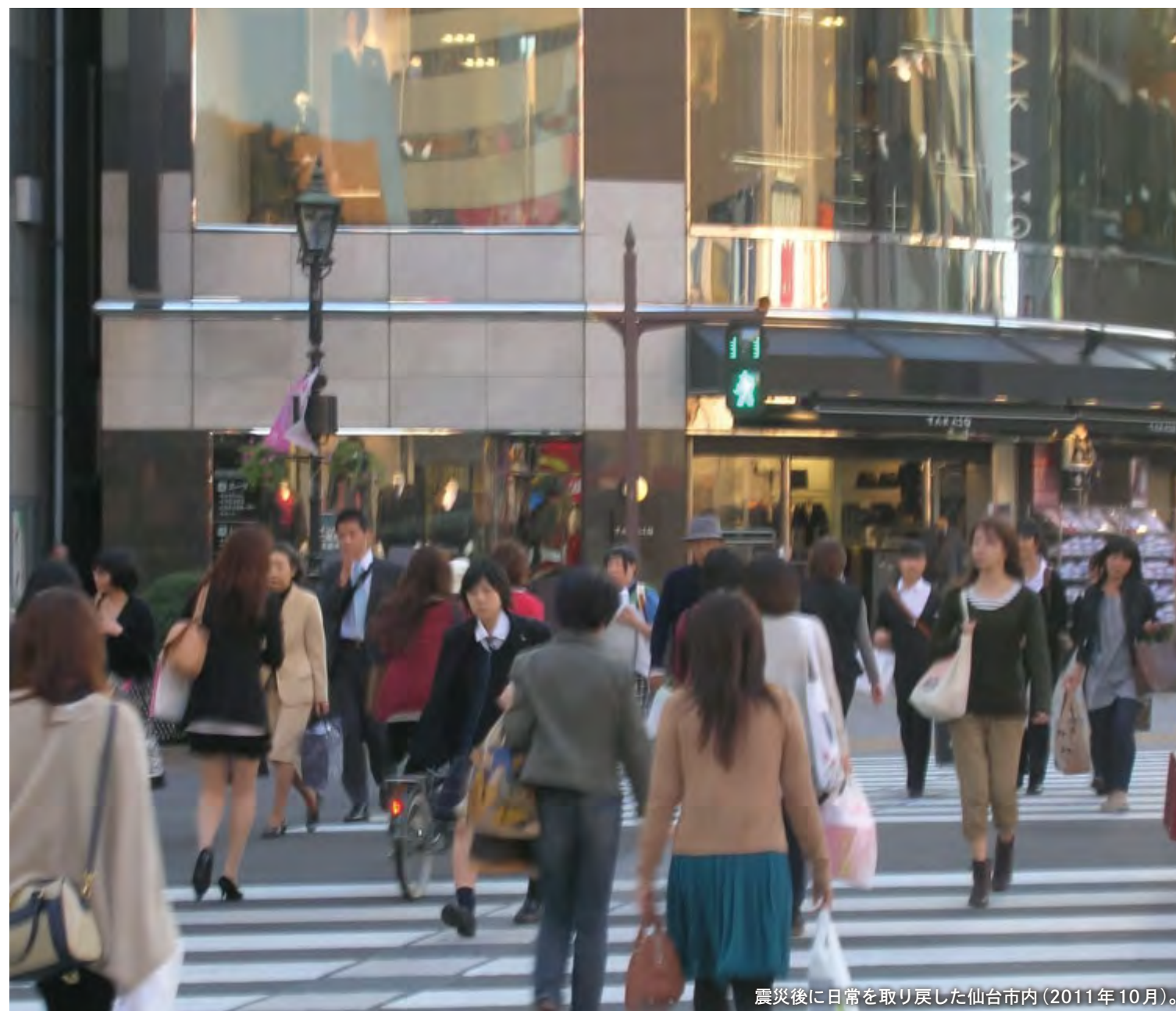
(上) 南三陸の道路。志津川ICができてから渋滞が続いていたが、現在は解消された(2017年11月)。

(中) 震災直後の気仙沼市内の道路。地域建設業ががれきをどかして通れるようにした(2011年4月)。

(下) 気仙沼市内ではまだ、たくさんの復興事業が(2017年11月)。

東日本大震災は、  
当たり前の日常が  
いかに大切であるかを知らしめた。  
地震や津波などの災害だけではない。  
鳥インフルエンザなどの家畜伝染病も  
大きな社会的リスクだ。

## 当たり前の日常がいかに大切か



震災後に日常を取り戻した仙台市内(2011年10月)。



# 高病原性鳥インフルエンザ感染 72時間以内に 約22万羽を埋却

2017年3月23日、  
栗原市の養鶏場で  
県内初の高病原性鳥インフルエンザ感染が確認された。  
宮城県建設業協会は宮城県と  
家畜伝染病に関する協定を結んでいる。  
緊急出動したのは栗原支部だ。  
72時間以内に約22万羽を埋却処分し、  
安全を守り日常をつないだ。



トンパックに入った鳥を掘削した穴に埋却した（2017年3月26日）。



鳥を埋めるための掘削作業。断面はマニュアルで決まっていて、合計391メートルを掘ることになった（2017年3月26日）。



困ったのは連絡体制だ。  
埋却地などでの作業には  
携帯電話を含め  
何も持ち込むことができないので、  
連絡の取りようがない。  
殺処分がどの程度終わり、  
どのくらいの鳥が運搬できるのか。  
情報が入ってこない。

## 高橋 隆 氏

高橋工務店（栗原市）

高橋工務店社長。県内初の家きん場での高病原性鳥インフルエンザ感染への対応だったので、想定外のさまざまな課題が発生した。寒さの中で寝ずの対応となったが、「興奮状態にあったのか、大した苦労だとは思っていない」。「次にまた発生すれば、もっとうまくやれる」と話す。栗原市出身。



## 発生

2017年3月23日16時40分、宮城県建設業協会栗原支部から「鳥インフルエンザ発生の疑いがある」と連絡がきた。私は栗原支部の土木・農業土木委員長を務めていて、鳥インフルエンザの担当だ。正式な検査結果はまだ出ていなかったが、17時には資機材の手配を始めた。19時ころに宮城県北部地方振興事務所栗原地域事務所の農業農村整備部に出向くと、「約22万羽だ」と教えられ、「すぐに埋却作業の準備をしてほしい」といわれた。

## 緊急対策業務

鳥インフルエンザのマニュアル講習会にも参加し、防疫演習にも参加していたのである程度の知識はあった。約22万羽だと（断面が決まっているので）埋却に必要な穴は延長290メートルだ。マニュアルでは殺処分した鶏を養鶏場内に埋めることになっていた。5年ほど前にその養鶏場を訪れ埋設場所を確認していたが、21時に養鶏場に確認に向かうと、46メートルしか掘れないとわかった。養鶏場の施設を拡充するなどしたため、埋めるスペースがなくなっていた。

24日2時40分に鳥インフルエンザの判定が出て、3時から養鶏場内の46メートルを掘り始めた。不足分については県と栗原市が協議し、養鶏場から約6キロ離れた市の廃棄物最終処分場に第2の穴を掘ることになった。だが、160メートルしか掘削できない。さらに第3の埋却場所を探してもらい、その日のうちに測量を始めた。第3の穴は185メートルだ。最初の設計で必要な穴は290メートルだったが、余裕を見て391メートルを掘ることになった。

## 想定外

栗原総合体育館に役所の現地事務所が設置されたので、私も入った。苦労したのは建設機械やオペレーターの振り分けだ。マニュアルにはないさまざまな作業も発生した。現地事務所には、県の北部地方振興事務所や北部家畜保健衛生所、北部土木事務所栗原地域事務所など、担当の異なる部局が入っていた。埋却作業を担当するのは北部地方振

鳥インフルエンザへの緊急対応の経緯

■3月23日（木）  
16:40 「鳥インフルエンザ発生の可能性あり」の連絡  
19:00 県北部地方振興事務所栗原地域事務所の農業農村整備部に到着・協議。約22万羽の処理。埋却に290m必要  
21:00 養鶏場で埋却スペースを確認。46m（第1）

■3月24日（金）  
2:00 現地事務所（栗原総合体育館）に集合。オペレーター4人  
3:00 第1の掘削開始  
6:00 第2の埋却スペースを測量160m  
9:00 第3の埋却スペースを測量185m  
※第1～第3で合計391mを確保  
12:00 第1の掘削完了  
12:30 第1の埋却開始  
17:00 現地事務所に集合。オペレーター3人、作業員4人  
18:00 第2の掘削開始

■3月25日（土）  
0:30 第2の埋却開始  
10:30 第3の埋却開始（自衛隊）  
※養鶏場から第3へ運搬。10トンドンプ6台

■3月26日（日）  
9:00 第2の掘削・埋却を再開。鶏ふん・鶏卵・飼料も埋却

■3月27日（月）  
2:05 すべての埋却を完了  
17:00 予備穴（110m）の埋戻完了



鳥を埋却する穴の掘削作業（2017年3月26日）。

興事務所農業農村整備部だが、顔見知りなので北部土木事務所からの依頼にも応えることになった。北部土木事務所は12カ所の消毒ポイントの運営を担当していて、移動のための燃料や投光器がほしいと依頼された。初めてのことで、役所も部局間で調整がつかない不都合や不具合が出てくる。そうした想定外の細々した対応もすべて我々が行うことになった。



## 連絡体制

すべての穴を掘るつもりだったが、知事要請で自衛隊がきてくれたので、第3の穴の埋却作業は自衛隊に任せることになった。鳥の殺処分や、埋設の際に石灰をまきブルーシートを敷く作業は県職員が担当してくれた。困ったのは連絡体制だ。埋却地などでの作業には携帯電話を含め何も持ち込むことができないので、連絡の取りようがない。殺処分がどの程度終わり、どのくらいの鳥が運搬できるのか。情報が入ってこない。三つの穴の作業状況の調整もある。私は役所の現地事務所に張り付いて

## 不眠不休

自衛隊は運搬作業ができないということだったので、殺処分されたトンパックを運ぶ作業は、第3の穴も含め我々が行った。自衛隊が第3の穴を掘り終えたのが25日10時30分だ。自衛隊の作業を優先し、第2の穴への運搬作業を中止して第3の穴に鳥を運び始めた。最終的に第2の穴に、養鶏場にあった飼料、鶏卵、鶏ふん、着用した防護服、使用した掃除道具などを埋却し、すべてを完了したのが27日2時05分だ。

栗原支部からは延べ300人が出動した。24時間対応なので、8時間ごとに3交代で作業を行った。今回は、72時間で約22万羽の鳥を埋却処分したが、最初の46メートルを掘った時点で、どのペースで作業をすればよいか計算できた。殺処分が終わりトンパックに詰めないと、我々の作業は止まってしまう。

## 体制整備

栗原支部の場合、岩手・宮城内陸地震（2008年6月）、東日本大震災（2011年3月）、東日本豪雨（2015年9月）など、災害経験が多かった。どういう形であろうと、災害協定に基づき動ける体制にしてある。何の迷いもない。鳥インフルエンザ感染に関しても、私は土木・農業土木委員長の立場で役所に向かった。ただ、「緊急対策業務は1社契約だ」といわれたのはしっくりこなかった。震災対応の場合、段取りのために委員長が役所に行ったとしても、応急対応は各社それぞれとの契約になる。あ



栗原支部内での対策会議。本部から千葉会長も出席した（2017年3月24日）。

いたので、栗原支部のメンバーに埋却現場に行ってもらい、外から見て状況を報告してもらった。三つの穴でどの程度作業が進んでいるかも、実際に足を運び報告してもらった。

殺処分の進ちよくなどの情報が的確に入ってくれば、もっと効率的に作業ができるのではないかな。

建機オペレーターには8時間ぶっ通しで作業をさせて苦勞をかけた。交代要員を付け、トイレや食事休憩を取れるようにすべきだった。私も23日夜から30時間近くは寝ていなかったの、頭が回らなかった。仮眠を取ろうとしても、いろいろなところから電話がくる。



鳥の埋却作業。8時間交代で作業を行った（2017年3月26日）。

くまで栗原支部での対応だと理解してもらえたが、違和感はあった。

3月23日は年度末で工事も一段落していたので、オペレーターを集めることができたが、いつ鳥インフルエンザが発生しても大丈夫な体制にしておきたい。オペレーターを1社から5～6人確保するのではなく、各社2人という具合にして、全社が対応できる形にした方がよいかもしれない。

（インタビューは2017年10月15日）

## 宮城県が対応マニュアルの改訂作業をしているようなので、それが出たら宮城県建設業協会全体に経験を伝える機会を持ちたい。

上田 徹 氏

宮城県建設業協会栗原支部長  
上田建設（栗原市）

## 全員でサポート

宮城県建設業協会本部と宮城県が、鳥インフルエンザなどの家畜伝染病に関する協定書を結んでいて、栗原支部は北部地方振興事務所栗原地域事務所管内の緊急業務に関して、同様の地域協定を結んでいる。2017年3月23日の夜8時前に北部地方振興事務所の栗原地域事務所に向かうと、「協定に基づき緊急対策業務を委託する会社を早急に選定し、報告してほしい」といわれた。支部長判断で、土木・農業土木委員長として鳥インフルエンザ対応の準備をしている高橋工務店を推薦することにした。支部役員には後に電話で了承をもらい、機関決定した。

当支部には17社（現在は18社）の会員企業がいて、

## 地域貢献活動

8時間交代の24時間体制で、過酷な作業だった。雪が降っていて寒かったし、休憩もできなかった。防護服も着なければならぬ状況で作業してもらった。「72時間でとにかく完了させる」という厳しさもあったのに、本当によくやってくれた。

我々の職能を通じて地域に協力できることはこれまでもやってきた。災害対応を含め当たり前と思

## 経験を踏まえ

今回はトンパックに入った状態で鳥が運ばれてきたが、牛や豚なら1頭ずつ埋却する。作業員の精神的なつらさもあるはずだ。過酷だが、対応の準備はしておかなければならない。業務委託された会社をサポートする活動も組織だったものにしたい。今回の経験を踏まえ、支部とし



上田建設社長。栗原は内陸地域なので震災関連事業もほぼ終了。事業量が少なくなっている実感があり、「自助努力もしながら、地域に必要な公共事業を確保していかなければならない」と話す。栗原市出身。

うち9社が高橋工務店に協力して実際の作業にあたった。その他の会員が何もしなかったわけではない。自主パトロールを行ったり、連絡調整を行うため当番で対策本部に詰めてもらったりした。協定に基づく業務委託とは違った形の、支部としてのボランティアだ。支部会員全員でサポートしように対応した。

ってきたので、鳥インフルエンザにも対応した。地域貢献活動は続けていきたいし、地域建設業の存在価値や意義を認めてもらわないと、地域で会社を営むのは厳しいものがある。災害時に停電で信号が止まった時に、主要部の信号を稼働させる協定も警察署と結んでいる。災害時に要請があれば、発電機を使って信号を動かす。きっかけは東日本大震災だ。

て対応を考えたい。宮城県内のどこで鳥インフルエンザが発生してもおかしくない。宮城県が対応マニュアルの改訂作業をしているようなので、それが出たら宮城県建設業協会全体に経験を伝える機会を持ちたい。

（インタビューは2017年11月15日）



ミッション3 地域の笑顔をつなぐ

# 第1回 「東北・みやぎ復興マラソン」

2017年9月30日と10月1日  
津波被害が甚大だった  
名取市、岩沼市、亶理町で  
第1回「東北・みやぎ復興マラソン」が  
開かれた。  
フルマラソンには9,758人が参加。  
真っ青に晴れ渡った空の下、  
被災地を駆け抜けた。





# 被災地を走り、感じ、発信

被災地を走り、被災地の今を感じ、復興の状況を発信してもらう大会だ。津波を防御するかさ上げ道路がコースに使われたほか、千年希望の丘(岩沼市)のそばにはエイドステーションが設置され、多くの人が鎮魂に訪れる日和山(名取市)が折り返し地点に設定された。



かさ上げ道路である玉浦希望ラインもコースに使われた(2017年10月1日)。



震災後に整備された「千年希望の丘」のそばにはエイドステーションが(2017年10月1日)。



(左) 日和山のそばにある東日本大震災慰霊碑。鎮魂の思いを胸に走った人もいたはずだ。(右) フルマラソンの折り返し地点となったのは、名取市の日和山だ。





# マラソンランナーの想い

復興途上にある被災地を、大勢が走ることで少しでも地域に元気と賑わいを創出できるなら、その中の1人になりたいと思います(福井県)

閑上地区をボランティアで何度も訪ねました。実際に自分の足で走って、今の様子を目に焼き付けたいです(山梨県)

必死にヒーロー走っている姿を見て、どうぞみなさん笑ってやってください。みなさんが笑ってくれたら、僕たちも笑います。その顔が一番うれしいから(愛知県)

震災状況を見ていましたが、何も力になれず、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。風評被害などありますが、素晴らしい地のため、全力で走ります(広島県)

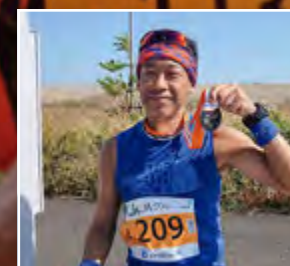
去年の震災の時に東北の皆さんの言葉が本当に励みになりました。感謝の気持ちを込めて走りたいです(熊本県)

—— エントリー動機より



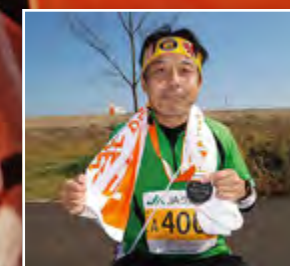
飯 俊治 さん

東京都からペースランナーとして参加。「震災後、高速バスで石巻市や女川町にボランティアにきていた」という。出場したいと思っていたところ、ペースランナーの声が掛かった。3時間ペースで引っ張るのが仕事だったが、「みんなに声を掛けながらペースをつくり、景色を楽しみながら走った」。



太田 勝也 さん

東京都から参加。仙台市出身。「震災時は東京で働いていたので役に立てず、復興マラソンに参加してみようと思った」。「心残りは、各エイドステーション(給水所)で食事ができなかったこと」。地元ならではの味が振る舞われていたが、給水のみで駆け抜けた。



菅原 勇司 さん

「写真を撮ってもらえますか」と、差し出された菅原さんの携帯電話は、力走を物語るようにぐっしょりと汗に濡れていた。41回目のマラソンという。「暑くて後半は強風にさらされた」というが、自己3番目のタイムだった。神奈川県から参加。



## 被災地を走って、 感じて、 復興の状況を発信してもらう

被災地は元気になりつつあるが、復興はまだまだであり、震災の記憶を風化させてはならない。仙台湾南部の復興道路（かさ上げ道路）の一部が2017年秋口に開通するということもあり、ここでマラソン大会を開くことはできないかという話になった。日本中、あるいは世界のランナーにきてもらい、被災地を走って、感じて、復興の状況を発信してもらう。復興に向け一緒に歩んでもらいたいという気持ちから、「東北・みやぎ復興マラソン」を開催することにした。

マラソン大会の主催は初めてだ。宮城陸上競技協会や宮城県警などの協力を得て、社員、スタッフですべてを行った。日本陸上競技連盟とも打ち合わせを重ね、マラソンコースとして公認を取ることができた。国際陸上競技連盟の認証も得た。

## 完走者に贈られる フィニッシャーズストーンには、 石巻市雄勝町の雄勝石を使った

復興マラソンでは税金を投入していない。通常は自治体から協賛金をもらって開催するのだが、税金は復興のためにお使いくださいということで、ランナーの参加費とスポンサーの協賛金で成り立たせた。

フルマラソンの完走者に贈られるフィニッシャーズストーンには、石巻市雄勝町の雄勝石を使った。雄勝石は以前から有名だったが津波で流出し、ボランティアが回収して何かつこうと検討しているところだった。首にかけるリボンは地震で被災した熊本県の会社につくってもらった。

これ以外にも復興支援策が三つある。一つ目は、被災地の子どもたちを元気にすれば、大人も元気になるということで、岩手、宮城、福島の前被災3県のスポーツ少年団にウォータージャグを贈った。トータル500

個だ。二つ目が、スピーカー付きの防災・減災広報車の贈呈だ。全人口に対する死者・不明者の割合が被災3県で最も高かった女川町に贈った。三つ目が、常設のイラスト付きマラソン距離看板の設置だ。マラソンコースのレガシー化ということで、全国の小学生からイラストを募集した。通常、距離看板はマラソン大会が終われば撤去してしまう。常設は全国初ではないか。距離看板があれば人が集まり、「今日は何キロ走ってみようか」となる。被災地ににぎわいを取り戻す趣旨だ。小学生のイラスト付きで、「復興」「がんばろう」「絆」といったコメントも入っている。

“がんばれ”という  
声援はよくあるが、  
“ありがとう”は初めてだった

フルマラソンは出走者数が9,758人、完走者数が9,045人だった。完走率が高く、47都道府県すべてから参加者があった。大会後、フルマラソンを完走した仙台市泉区に住む81歳の方が「事務局にお礼をいいたい」と当社を訪ねてきたことがある。「復興マラソン 楽しく完走」というその方の投稿が、河北新報の「声の

交差点」にも掲載された。

約3,000人のボランティアの協力も得た。遠方からきていただいた方もいたし、スポンサー企業からも出していた。みなさんの熱い気持ちが伝わってきた。地域の方も沿道に出て横断幕を掲げてくれた。「ありがとう」の横断幕が圧倒的に多く、年配の女性4人が、ふとんに「ありがとう」と書いてくれたものもあった。大会後にSNS（ソーシャル・ネットワーク・システム）を見ると、『『がんばれ』という声援はよくあるが、『ありがとう』は初めてだった』というランナーも多かった。

復興途上ならではの  
コース変更だ。  
建設業の力でどんどん復興  
していくのはよいことだ

宮城県建設業協会には復興マラソンに協賛してもらうとともに、イラスト付き距離看板の設置もお願いした。工事がタイトなスケジュールになってしまったが、よい試みだったと自負している。来年も小学生に募集をかけ、イラスト部分だけを変えつつもりだ。

建設業界がいなければ、被災地は

ここまで復興できなかった。来年の大会ではコースがちょっと変わる。復興工事を行うので、この道は使えないという部分がある。復興途上ならではのコース変更だ。建設業の力でどんどん復興していくのはよいことだ。ともに復興に向けてがんばろうという気持ちになる。

復興マラソンを  
主催できて誇りに思う。  
これからも大きく  
育てていきたい

全国のランナーにエントリー時に出場動機を書いてもらったが、心を打つ内容がいっぱいあった。「復興に対し何もできていないことに罪の意識を感じていた。復興支援になる活動を探していた」という方もいた。

当社は、JCBクラシックというプロゴルフトーナメントを2007年まで36年間やってきた。歴史もあるよい大会だったが、新たに復興マラソンを主催できて誇りに思う。「こういう機会をつくってくれてありがとう」というSNSの書き込みも多かった。やってよかった。これからも大きく育てていきたい。

（インタビューは2017年11月21日）

# 「東北・みやぎ復興マラソン」 を主催した

—— 後藤 誠市 氏 仙台放送経営企画本部広報戦略局長



フルマラソンの前日には親子でのベアランも行われた（2017年9月30日）。





23キロ地点での距離看板の設置作業（2017年9月26日）。



23キロ地点の距離看板の前を走り抜けるランナー（2017年10月1日）。

# イラスト付き 距離看板を 設置

高低差が少なく、  
初心者からベテランまで楽しめる  
日本陸上競技連盟の公認コースだ。

1キロごとに  
全国の小学生から公募した  
イラスト付きの距離看板が  
常設してある。  
設置工事には宮城県建設業協会の  
会員企業が協力した。

「絆」や「復興」「がんばれ」  
といった内容が多く、  
子どもらしく、  
心が温かくなる絵が  
描いてあった。

平形 徹 氏 熱海建設（仙台市）

マラソンの公認コースに1キロごとに距離看板を設置する必要があった。当社が担当したのは、基礎が必要なタイプだ。プレートタイプが何カ所かあったので39基を設置することになり、すべて私が施工管理を行った。

発注者は仙台放送だ。2017年8月末に話がきて、最初の打ち合わせを行った。名取市、岩沼市、亶理町、さらには宮城県仙台土木事務所に道路占用許可を申請する必要があった。仙台放送が占用許可を取り、当社で工事のための道路使用許可を警察署に申請し、着工できたのは大会直前の9月21日だ。

1日3基程度を設置する予定だったが、9月29日までに工事を終わらせてほしいという要望を受け、3パーティー体制を確保し同時進行で1日8基程度を設置した。何とか設置を終え、25日から仕上げ作業にかかっている。

距離看板には小学生のイラストが付いている。



熱海建設工務部工事主任。震災後は主に、河川やダムなどの復旧工事を担当。海岸堤防の工事を担当している時に、台風で貞山運河が破堤し現場に入れなくなった経験も。遠田郡出身。

「絆」や「復興」「がんばれ」といった内容が多く、子どもらしく、心が温かくなる絵が描いてあった。設置工事をしてると目が行ってしまふ。記念に写真を撮ったりもした。名取市から岩沼市、亶理町で距離看板の設置作業に携わり、約40キロを歩いてみて、復興工事はピーク時より件数は減ってきているものの、まだまだやっているところはあると感じた。

9月24日は、岩沼市で行われた宮城県建設業協会の植樹にも家族で参加した。上の子が小学校1年、下の子が4歳になり、それなりに植樹のお手伝いができた。「復興」といった難しいことはわからないかもしれないが、植樹の記憶は残ったのではないかな。

（インタビューは2017年9月26日）



小学生が描いてくれたイラストが付いた距離看板は、大会が終わっても常設される。



震災後に自分たちがつくった  
かさ上げ道路や千年希望の丘を見ながら走った。  
感無量だった。  
震災からの状況が走馬灯のように浮かび、  
「ここまできたんだな」と思った。  
苦しい時には沿道の声援が背中を押してくれた。  
涙も涸れるほどきつかったが、  
完走することができた。

## 渡邊 大作 氏

渡辺サービスセンター(岩沼市)

亡くなった父の跡を継ぎ、2010年3月に渡辺サービスセンター社長に就任。会社の新生を目指し、組織を若返らせるなどしたところ、震災が発生。若いスタッフに不安を抱えていたが、「震災後2～3年で数十年分の仕事をこなし、今では自信を持って仕事をしている」という。岩沼市出身。



## 本社移転

震災当時は岩沼市相の原に本社があり、沿岸部から離れた場所だったので会社としての津波被害はなかった。緊急対応が可能だったので、その日は避難所に仮設トイレや発電機を設置した。その後、がれき処理や民間建物の撤去・補修、堤防や水路の復旧などに取り組むことになった。

震災対応をしているうちに、現在の岩沼市下野郷に本社を移転しようと考えようになった。仙台空港に近く、2.5メートルの津波が押し寄せた場所だ。工業団地に入っていた会社が撤退し、ゴーストタウンようになっていた。震災後に仕事のボリュームが増え、社員や資機材も増えて本社が手狭になってきたこともあったが、ここが暗いまでは復興に向かう形にならない。活気を取り戻す意味でも、最も津波被害の大きかった場所に本社を移転することにした。2013年6月のことだ。

自宅を流された社員もいた。「社長、あえてここに事務所を移すのはどうなのか」という声もあったが、「全身全霊で復興事業に取り組むには、自分た



あえて津波被害の大きかった場所に移転した本社(2017年12月)。

ちが行って暗いイメージを払しょくすることが、地域の元気づけになる」と説明すると、理解してくれた。津波に備え、資機材は足場を組んで2階に上げ、防災関連機材も装備した。津波がきたら逃げることを前提にしている。移転当時は物流も止まり、周りには何もない状態だったが、数年後には多くの会社が移ってきて、地域の復興は進んでいる。

## 東北・みやぎ復興マラソン

「東北・みやぎ復興マラソン」に出場した。2017年4月に「一緒に走ろう」と声を掛けられたのだが、マラソン経験がなかったので悩んだ。「完走は無理でも参加することに意義がある」と考え、出場することにした。大会当日、震災後に自分たちがつくったかさ上げ道路や千年希望の丘を見ながら走った。

感無量だった。震災からの状況が走馬灯のように浮かび、「ここまできたんだな」と思った。また、岩沼は復興が早かったので、建設業の仕事が落ち着いてきている。「これから建設業をどのように担っていくべきか」という課題も感じながら走り抜けた。苦しい時には沿道の声援が背中を押してくれた。涙も涸れるほどきつかったが、完走することができた。

大会1週間前には当社を含め、かさ上げ道路(玉浦希望ライン)を整備した6社が、ランナーに気持ちよく走ってもらうために道路清掃を行った。宮城県建設業協会名亘支部としてどうかかわっていけるか

も、次回の大会までに考えたい。復興マラソンの雰囲気を楽しもうと、大会前後にこの地を訪れる方も多かった。こうした方にも地元として何かできれば、被災地の復興への理解のすそ野が広がるのではないかな。



力走する渡邊氏。さまざまな思いを胸に、沿道の声援を感じながら完走を果たした(2017年10月1日)。



## 社員の育成

当社は20～40代の社員が7割を占める。私もまだ40代なので、兄貴的な気持ちで社員と向き合っている。社員が何を思っているのか、私が会社をどう考えているのか。コミュニケーションが重要だ。ボウリング大会やバーベキューも行う。子どものいる社員もいるので菜園をつくり、来年から一緒に野菜を育て、収穫して芋煮会をするつもりだ。社員の子どもの顔と名前はすべてわ



千年希望の丘での植樹祭にも、社員やその家族と参加した(2016年5月)。

## 地域にどう根ざすか

地域建設業にとって大切なのは、地域にどう根ざすかだ。建設業は高齢化が進み、求人を出しでも若年者が入ってこない。楽しい業界だという部分をもっとアピールしなければならない。国や自治体も、若年者が安心して働けるようにしてほしい。半公務員のようにしてやり、年間を通して仕事があることが、若年者の雇用や定着につながるのではないかな。

また、人手が足りないなら地域の中で、対価を払って働くことができる人を募ればよい。現状では社会保険への加入などの条件があり、入口のハードルが高いので企業にも負担になる。もっと簡単に地域の人々が建設業の仕事に就いたり、離れたりでできる状況ができれば、ワークシェアリングや働き方改革にもつながる。技術や品質は私たちがしっかり担い、地域で労働力の確保に柔軟に対応できれば、地元雇用にもなる。

かる。「この子のためにも、社員を育てて守らなければならない」「この子たちの世代にバトンをつながなければならない」と思う。みんなが安心して働いてくれているようで、若い社員の離職はほとんどない。

岩沼に「しおかぜ福祉会」が運営する障害者施設がある。建設業は仕事もなくなる中、障害者施設や介護施設は人手が足りない。会社としてすぐにそうした仕事に取り組むわけではないが、若い社員を数週間程度、ボランティアと研修に行かせている。

建設業は普段、土やコンクリートと向き合っている、人とのかかわりが少ない。だが、障害者施設に行けば、自分が声を掛ける立場になる。ボランティアから戻ると社員は変わる。建設現場ではマニュアルがあり、いつまでに何をすればよいかが見える。だが、障害者施設では何が起きるかわからない。健康なのか、食事をしているかを観察し、言葉を読み取ってやらなければならない。現場で3日間の深夜作業があったとしても3日後には終わるが、障害者施設のスタッフの仕事は24時間休みなく続く。「建設業より大変な仕事がほかにある」とわかる。



避難場所になると同時に、津波の威力を減衰させる千年希望の丘(2017年9月)。全部で15基あり、長谷釜公園を渡辺サービスセンターが施工した。

地域がかかわることで、建設業が必要な産業だと理解してもらえる。

(インタビューは2017年12月20日)

## 車いすジョギングやペアランも



車いすジョギングやペアラン、6キロのファンランも行われた。

メイン会場では被災地の名産品を紹介する「復興マルシェ」も。

各ブースにはグルメや名産品が並び、さまざまなイベントも行われた。

ペアラン(2キロ)にもたくさんの親子が参加した(2017年9月30日)。

## 親子でのペアランに参加して



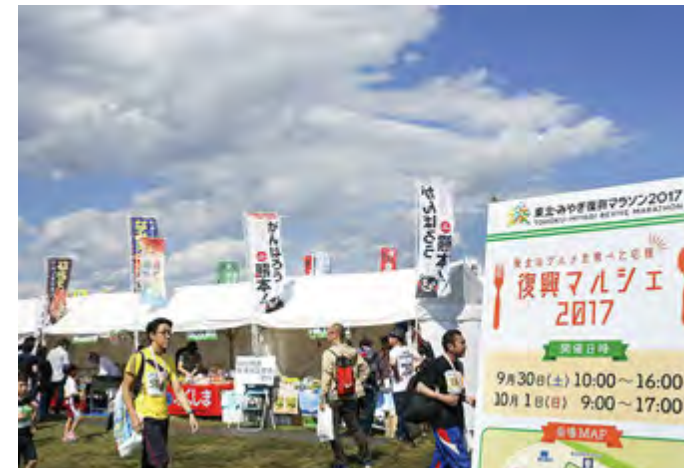
山口 俊輔 さん 隆ノ介 くん

トップでゴール。津波被害が甚大だった岩手県宮古市から参加。俊輔さんは、「景色も天気もよくて走りやすかった。周りの応援に元気をもらうことができた」。隆ノ介くんは、「楽しかった。また、走ってみたい」とにっこり。



亀谷 知穂 さん 鷲 くん

仙台市宮城野区から参加。震災時に1歳半だったという鷲くん。母親の知穂さんは、ペアランと一緒に走ってみて成長を感じたという。親子ランへの出場は初めてだったが、「この子がいたからゴールできた」。



各ブースが出展し、イベントなども行われた復興マルシェ(2017年9月30日)。



高橋 義慶 さん 琉維 さん

大崎市から参加。義慶さんは、機会があれば娘の琉維さんと親子ランに出場するようにしているという。「出場できるのは今だけ。タイムに関係なく、思い出づくりに楽しく走ることにしている」。



# クロマツの苗木を植樹

2017年9月24日。  
「東北・みやぎ復興マラソン」の6日前に、  
海岸防災林の植樹が行われた。  
ランナーが走る17キロ地点のすぐ脇だ。  
宮城県建設業協会が参加者を募集し、  
約250人がクロマツの苗木を植えた。  
毎年、コースを走るランナーに防災林を見て、  
成長や重要性を認識してもらうことが、  
震災を風化させないことにつながる。

マラソンコースのすぐ脇でクロマツの苗木を植樹した。



子どもたちも一生懸命に植樹のお手伝いをした。



千葉嘉春会長をはじめ、女性の会会長や宮城県建設業協会の幹部も植樹に参加した。



# みんなで作る 3Aの防災林

宮城県建設業協会が  
CSR(企業の社会的責任)活動の一環として  
0.8ヘクタールを引き受け、  
防災林の再生事業を行っている。  
昨年に続いて、  
今回は0.3ヘクタールに1,500本を植樹した。  
「あんぜんに」「あかるく」「あたたかく」の  
三つのAを掲げ  
「みんなで作る3Aの防災林」を目指す。



「みんなで作る3Aの防災林」の説明看板。



宮城県建設業協会の幹部による説明看板の除幕式。



植樹の記憶は子どもたちの心に残り、震災を風化させないことにもつながるはずだ。



みんなで力を合わせて植えたクロマツが防災林に成長し、地域を守ってくれる(2017年9月24日)。



## ミッション4 子どもたちの未来をつなぐ



測量機器体験をする子どもたち（2017年7月26日）石巻市。



遠くのパスや団地の看板などを測量機器で見てみた  
（2017年7月26日）石巻市。



職人さんが塗った発泡ウレタンにすぐ触ってみると、  
まだ温かった（2017年8月1日）名取市。



貞山運河の復旧工事の説明を聞く子どもたち  
（2017年8月3日）仙台市。



高所作業車の試乗（2017年8月1日）名取市。

# 小学生向け 親子現場 見学会

2017年の夏休みに、  
小学生向けの親子現場見学会が  
6回にわたって実施された。  
宮城県建設業協会と宮城県、  
あるいは仙台建設業協会、仙台市を交えて  
の共催だ。  
建設現場の中はどうなっているのか。  
何のために工事をしているのか。  
建設業の担い手を確保するには、  
子どものころに  
興味を持ってもらうのが一番だ。

## 6回にわたって実施された親子現場見学会

7月26日 石巻市 大沢川外災害復旧工事

7月31日 岩沼市 県道岩沼蔵王線（仮）姥ヶ懐トンネル工事

8月 1日 名取市 宮城県農業高校改築工事

8月 2日 岩沼市 県道岩沼蔵王線（仮）姥ヶ懐トンネル工事

8月 3日 仙台市 北貞山運河河川災害復旧工事  
仙台市東部復興道路工事

8月 7日 気仙沼市 気仙沼向洋高校改築工事



最終的に現場がどういう形になるかを想像してもらいたかった。

来年もこの現場で見学会を開けば、どれだけ道路がかさ上げされたかわかる。

この道路が津波をブロックし「仙台の守り手」になることを理解してほしい。

## 深松 努 氏

深松組（仙台市）

深松組社長。首都直下地震が発生したら、あれだけの人口を抱えたまま地域を直すことはできないと懸念。「その時に東北の役割が出てくる」と話す。空き家も土地も食糧もある。震災を体験したから動き方もわかるし、受け入れ体制もできる。富山県出身。



## 特別授業

仙台工業高校（仙台市宮城野区）の先生と話を  
する機会があった。9月になると就職活動が解  
禁になるので、3年生は4月から夏休みまで、二  
級土木施工管理技士の学科試験の勉強だけをし  
ているという。どう思うかと聞かれ、「資格を取っ  
てきたからといって現場で使い物にならない」「それ  
より、建設業に入ったらこういう仕事をするんだと  
理解してきてもらった方が離職しない。そういう授  
業をする時間がほしい」と答えた。

後に校長先生が仙台建設業協会を訪ねてきて、  
「ぜひ、授業をお願いしたい。保護者のいる前でも話  
をしてほしい」といつてくれた。高卒の子が進路を  
決めるには、両親の理解が大事だ。こんなありがた  
い話はない。仙台建設業協会として特別授業を始め  
る。現場の一日の流れや、工事の着工から完成まで  
の様子、ものづくりの喜びなどを教えたい。これら  
を理解した上で、「建設業はいいな」と思って入っ  
てきた子は会社を辞めないはずだ。

我々もどんどん学校に出て行って授業をした方が  
いい。私は年1回、東北工業大学（仙台市太白区）の  
1年生を前に話す機会があるのだが、「35年周期で、  
必ずまた仙台に地震がくる。その時、市民や家族を  
救えるのは、土木や建築を学んだみなさんしかないな

## 親子現場見学会

今年8月、当社と高野建設JVが施工する仙台市  
東部復興道路（かさ上げ道路）の現場で親子現  
場見学会を開いた。子どもたちの興味を引くに  
は、建機に乗せた方がよい。ドローンも飛ばし  
た。高所作業車で高く上がれば現場を一望でき  
る。最終的に現場がどういう形になるかを想像  
してもらいたかった。来年もこの現場で見学会  
を開けば、どれだけ道路がかさ上げされたかわかる。  
この道路が津波をブロックし「仙台の守り手」になる  
ことを理解してほしい。

子どもたちが喜んでいると、親御さんもほくほく  
する。見ていて微笑ましかった。小さいころに興味  
を持ったことは長続きする。少しでも建設業への興  
味が芽生えればよい。



東北工業大学で（2017年6月）。学生にはいつも「建設にかかわる場所に就職してほしい」と訴える。

い。役所でも建設会社でもいい。建設にかかわるこ  
ろに就職してほしい」と話す。

私たちもインフラだ。直す人がいなければインフラ  
は成り立たない。つくる人がいて、守る人がいて、直  
す人がいて、初めてインフラが継続し、文明的な社会  
生活を送ることができる。「それを支えているのがわ  
れわれだ」という話を、より多くの人に伝えたい。担  
い手確保にもつながる。



（上）子どもたちを高所作業車に乗せ、現場を一望してもらった（2017年8月）。  
（下）ドローンで撮影した現場。約6メートルかさ上げしてここに道路をつくり、津波を  
ブロックする（2017年8月）。



## 震災を伝える講演活動

震災を伝えるため、全国で174回の講演をしてきた。いろいろなところに呼ばれたが、異業種の前で話すのが最もPRになる。東京都足立区で講演した時には、「荒川の堤防は8メートルで足立区はゼロメートル地帯だ。荒川の堤防が決壊したら、8メートルの津波と同じだ」と話した。大きな地震が起きると余震で堤防にたくさんの亀裂が入る。そんな時に1時間当たり100ミリの雨が降れば堤防がもたない。「みなさんの地区は被害が甚大だ。水は正直なので、低いところ、弱いところに行く。一様に同じ形に堤防を強化しないと決壊するので、整備には時間もかかる」と説明するとわかってくれる。

宮城県では震災で約1万人が亡くなった。生かされた命だ。全国のみなさんに物心両面で多くの支援

## スーパードラゴンシティ

仙台は仮設住宅もなくなり、みんなが復興住宅に移った。かさ上げ道路が完成し、ちゃんと逃げてもらえるなら、同じ地震、同じ津波がきてもだれも死なない。「スーパードラゴンシティ」に生まれ変わった。

東日本大震災ではマグニチュード9の地震がきて、マグニチュード5以上の余震が358回もあつ

## まちを守る

仙台建設業協会で今年5月、道路の維持管理や除雪などを共同受注する「杜の都建設協同組合」を立ち上げた。建設会社を廃業する最大の理由は後継者がいないことだ。これからは廃業する人が増えるはずだ。穴が空いてしまえば、その会社が守っていた地区が守れなくなることから、様々な対応状況を確認する必要がある。

これからまちの守り方は変わっていくと思う。建設会社が少なくなってもまちの面積は変わらない。雪が降れば除雪も必要だ。仙台が仙台として成り立つための維持管理に関する仕事は、準公務員的な扱いにしてもらわないとできない。仙台を守るパートナーとして、縁の下の力持ちになり得るよう体制づ



国連防災世界会議ではがれき処理の「仙台方式」について講演した(2015年3月)。仙台建設業協会では、再び震災が発生しても同じ体制で対応できるよう、関係機関と協定を結んでいる。

をいただいた。食糧がなくて社員にすごまれ、どうしようかと思った時に、全国の仲間が食糧や燃料を持ってきてくれた。「感謝報恩」。みなさんの助けに感謝し報いるため、震災を伝える講演のオファーを断ったことはない。私のライフワークだ。

たが、仙台で建物が倒壊して亡くなった人はゼロだった。津波は海岸堤防を乗り越えてくるだろうが、海岸堤防があり、400メートル先にかさ上げた東部復興道路がある。一杯になってからあふれるので、津波の到達までに1時間半程度は稼げるはずだ。13カ所の津波避難タワーもつくっているので、お年寄りが取り残されても絶対に助かる。世界に誇れるまちになった。

くりを強化していく。仙台はまだ建設会社がたくさんあるからよいが、小さな自治体でみんなが廃業したら、役所も困るが、住民が一番困るはずだ。真剣にまちを守る新たな戦略を考えなければならない。

(インタビューは2017年11月21日)



(上) 建設機械の試乗(2017年7月26日) 石巻市。  
(下) 空を飛ぶドローンに子どもたちは興味津々だった(2017年8月3日) 仙台市。

# 建設業の道を選んでくれるなら

どうしたら興味を持ってくれるのか。協会会員の担当現場が中心となって動き、それぞれの現場担当者が知恵を出し合った。建設機械の試乗、丸太切りに釘打ち体験、ドローンの操縦見学、ブロックの重さ当てクイズ…1人でも建設業の道を選んでくれるなら未来につながる。

## 気仙沼向洋高校の見学会に参加した子どもたちの声(アンケート結果より)

“ふつうは入れないげん場に入れてよかったです。”  
“きかいにのれてたかいところからけしきをみれたので、よかったです。”  
“とくに、ラジコンのそうさがたのしかったです。またさんかしたいです。”  
“きかいがいっぱいあって、おどろいた。”





少しでも興味を持ってもらい、  
若手が減少している  
建設業界に入る  
きっかけになってくれれば。

**佐藤 充 氏** 小野良組（気仙沼市）

## 打ち合わせ

私は気仙沼向洋高改築工事（その2）の作業所長を務めている。当社は実習棟を担当しており、規模は鉄骨造2階建て、建築面積約2,053平方メートル、延床面積約3,887平方メートルとなる。現在は主に内装・仕上げ工事に入っているところだ。当工事は建築工事が4分割で発注されており、その1が校舎棟、その3が体育館棟・生徒会館棟、その4がプール付属棟をそれぞれ施工している。

気仙沼向洋高改築工事で親子現場見学会を開く予定があると聞いたのは、今年6月ころだ。現場全体での合同見学会だったが、各社の担当者が集まって打ち合わせをする機会は、予定が合わず数回となっていた。

何をやったら子どもたちに喜ばれるのか。宮城県建設業協会気仙沼支部の担当者の方と打ち合わせをしながら内容を詰めていった。ラジコン建機の操作、建機の試乗体験、測量機器体験、ドローンの空撮・見学の四つにしぼる中で、子どもたちの先頭に立つ人が必要だということになり、当社の現場担当者や若手社員の中からジュニアリーダー3人を選抜することになった。入社1～2年目の社員だ。

## きつかけに

現場を見学した後、四つのグループにわかれ、ラジコン重機の操作などをしてもらった。予想以上に女の子の割合も高く、体験している子どもたちの姿を見て、少しでも興味を持ってもらい、若手が減少している建設業界に入るきっかけになってくれればと思った。

現場見学会の開催日が、鉄骨の建て方作業をしている時期だったので、業者にも協力してもらい、半端作業がでないよう見学会前日までに調整した。開



小野良組建築部気仙沼向洋高改築工事（その2）作業所長。入社15年目。設計事務所を営んでいた父の影響で建設業へ。震災後は災害公営住宅などの施工を担当した。気仙沼市出身。

## 興味津々

現場見学会に参加したのは小学生29人、保護者19人、気仙沼向洋高の先生12人だ。場内の段差をなくし、立ち入り禁止エリアを設定した上で、建物の外側から工事の様子を見学してもらった。先生方には別グループにわかれ、建物全体を見てもらった。

私が子どもたちを先導し工事の説明をしたが、普段見ることのできない施工中の建設現場ともあれば、誰もが興味津々。質問コーナーでは「建物はどのくらいの高さですか」「長さはどれくらいですか」など、思っていた以上に多くの質問が出た。「見学する子どもたちもいろいろな目・考えを持っているんだな」と正直おどろいた。

# 気仙沼向洋高校の親子現場見学会を担当してみた

催までさまざまな苦労はあったが、少しでも建設業という職業を知ってもらえるのなら、また現場見学会をやってみたい。（インタビューは2017年11月14日）



小野良組気仙沼向洋高改築工事（その2）担当。現場見学会のジュニアリーダーを任せられ、何をすればよいか、当日まで戸惑ったという。甥と姪がよく遊びにくるので、子どもと接することに違和感はなかった。気仙沼市出身。

## ジュニアリーダー

現在の気仙沼向洋高校の現場にきたのは今年4月だ。8月に宮城県と宮城県建設業協会による親子現場見学会が行われ、（子どもたちの世話をする）ジュニアリーダーを任されることになった。ジュニアリーダーは3人いて、私はラジコン建機の現場体験を担当することになった。

子どもたちがラジコン建機で荷物を吊り上げたり、碎石をすくい上げたりするのだが、操作の指導は宮城県建設業協会本部職員がしてくれたので、私は子どもたちを整列させる役割だった。ラジコン建機を2台使っていたので半分に分けて並ばせ、片方が終わったらもう片方に誘導したのだが、子どもたちは楽しそうだった。人気があり、みんながもう1度やりたがった。

現場には  
幼稚園のころから行って、  
父の仕事を見ていた。  
子どものころから見ていると  
興味を持つようになる。

**米倉 勇也 氏** 小野良組（気仙沼市）

## 現場見学

父が建設業を営んでいた。進路を決める高校2年の時に、気仙沼市内の5校を集めた就職説明会があり、小野良組の現場見学をさせてもらえることになった。見学したのは土木と建築の現場、それぞれ2～3カ所だ。どの現場も規模が大きく、感激して小野良組で仕事をしたいと思った。

入社は2015年4月だ。最初に国道の維持工事を担当した。研修期間中なので、その後も数カ月単位でいくつかの現場を経験したが、大変だったのはものや道具の名前だ。一度聞いても、しばらくするとわからなくなる。「これかな」というものを持って行ったが、違っていて怒られたこともある。

南三陸町では、消波ブロックの製作から据付までを行う工事を担当したが、当社からは作業所長と私の2人きりだった。施工写真の撮影や整理を任せてもらい、竣工検査でも自分の撮った写真が使われていたので、多少なりとも期待に応えることができたのではないかな。

## 父の仕事

私が土木を志したのは、父が土木の仕事をやっていたからだ。現場には幼稚園のころから行って、父の仕事を見ていた。子どものころから見ていると興味を持つようになる。もっとこうした現場見学会があれば、子どもたちに建設業に興味を持ってもらえるのではないかな。

今後は仕事内容を早く覚えて、資格の取得に向けてがんばりたい。私は土木志望なので、まずは二級土木施工管理技士の資格だ。実地試験を受けるには4年半の実務経験が必要なので、あと3年程度だ。

（インタビューは2017年11月14日）



津波被害を受けた  
宮城県農業高校を  
移転・新築する工事で  
親子現場見学会が行われた。  
ずっと仮設校舎で授業が行われていて、  
待ちに待った新校舎だ。  
見学会には  
同校の生徒と先生も参加した。



校舎棟の中に入り教室も見学した。

# 待ちに待った 宮城県農業高校の新校舎



**石原智宣君 (2年) 発泡ウレタンの吹きつけを体験**

パイ投げのような泡の出るスプレーで、スポンジみたいだった。初めてで面白かった。今まで(研修などで)いろいろな高校に行ってみて、「こんな校舎に入りたい」と思ったが、自分たちの校舎に入ることができる。



生徒たちにとって楽しみにしていた見学会だ(2017年8月1日)。

**島貫萌さん (2年) 吹奏楽部部長**

震災で楽器が壊れ、いろいろな人の支援を受け、修理しながらコンクールに出場してきた。県で銀賞を取ることもできた。(仮設校舎では)音楽室の中か屋外でしか練習できず、大きな音を出すこともできなかった。新校舎ではレッスン室もできるので、パートごとの練習もできる。



中央が島貫萌さん。左は穀田優夏さん、右は最上あゆみさん。3人とも吹奏楽部だ。



**橋本朱音さん (3年) 生徒会長**

私も新校舎に入りたい。うらやましい。バスケット部だったが、体育館も週1~2回しか使うことができず、公民館の体育館を借りて練習した。後輩には、宮農が仮校舎だったことを忘れないでほしい。新しい校舎が当たり前だと思う、大切に、きれいに維持してほしい。





## 「感謝を力にして がんばって行こう」 という思いでやってきた

仙台空港の近くに学校があった。あの日、地震がきた後に校舎内を点検していると、黒い帯状のものが向かってるのが見えた。津波だ。最も高い3階建て校舎の屋上に逃げた。海を見ると白波が立っていたので、さらに高い給水タンクに上がった。雪が降ってきた。これからどうなるのか。いつしか白波が消えていたので、暖を取るために3階の教室に入った。全員無事だった。

1階は水没して2階の床まで水に浸かり、校舎が使えなくなった。先生方で協議をし、5月の連休明けから加美農業高校（色麻町）、柴田農林高校（大河原町）、亘理高校（亘理町）に学科と学年が分散することになった。加美農業高校までの交通手段がなかったため、名取市がバスを用意してくれた。ただ、2時間近くかかるため、1時間目の授業はバスの中で行うことになった。柴

田農林高校や亘理高校へも、自転車で通っていた生徒が電車で通学するようになり、授業が再開された。

津波に流され、何もない状況だった。県内の学校から余っている教科書をもらったり、卒業生から制服をもらったりした。靴やかばんも支援してもらった。卒業生が間に入り、廃棄する放置自転車を他県から譲り受けたこともあった。多くの方の支援で現在がある。職員、生徒がともに、「感謝を力にしてがんばって行こう」という思いでやってきた。

## 仮設校舎に移ってからの 生徒の活躍は すさまじいものがある

2011年9月に現在の仮設校舎に入った。宮城県農業大学のグラウンドを借りて、最初にT字の2階建て仮設校舎が、翌年に二つの仮設実習棟ができた。本校には寮もあるのだが、JA学園宮城という研修施設の一画を借りて寮生活も再開できた。3校に分散していた生徒が一緒になり、宮城県農業高校という一つの組織

# ようやく仮設校舎から 新校舎へと移る

—— 佐藤 淳 氏 宮城県農業高校主幹教諭



として動けるようになったのは、うれしいことだった。

仮設校舎に移ってからの生徒の活躍はすさまじいものがある。逆境をハンディにするのではなく、感謝を力にして活躍している。部活動でも農業クラブの活動でも、全国大会に出たり、最優秀賞を取ったりして、メディアに取り上げられることも多くなった。メディアを通じて、本校ががんばっていることを、支援してくれた方に知らせることができた。

2017年3月の卒業生の答辞は心に残っている。「仮設魂」をもっていろいろな活躍ができた。仮設校舎での生活があったから、今の私たちがいる。1、2年生は“仮設魂”を引き継いでほしい」という内容だ。「生徒はそういう思いでやってきたんだな」と強く感じた。

## 遠目で見ていた 学び舎の建設現場に入 ることができて、 感動したのではないか

8月に新校舎の現場見学会があったが、生徒は楽しみにしていた。外から遠目で見ていた学び舎の建設現

場に入ることができて、感動したのではないか。「わあー」という歓声しか聞こえてこなかった。私も図面を見せてもらい、「ここが生徒昇降口になるのか」などと、完成をイメージしながら見学した。高所作業車の上から見た現場の光景もすごかった。仮設校舎に比べ、あまりにも広大だと気付いた。定点カメラで現場を撮影した映像も見せてもらったが、日を追うごとに建物が変わっていく様子がわかる。

建物の引き渡しは2018年2月上旬の予定だ。3月に引っ越しをして4月から新校舎に入る。これまで6年間仮設校舎にいたが、仮設校舎しか知らずに卒業していった生徒が、現在の3年生も含め5学年ある。新校舎に入れなかった彼らの思いを伝えていくのも私たちの使命だ。5学年の卒業記念の全体写真を新校舎にずっと飾ることになっている。

新校舎はとにかく広い。仮設校舎はコンパクトに収まっているので、なかなか新たな環境に慣れないかもしれない。コンパクトだったので移動も早かったが、実習場への移動ルートも模索しなければならない。新

しい機材も入るので、楽しい、わかりやすい授業や実験ができれば何よりだ。部活動の環境も変わり、運動部もののびのび活動できる。

## 母 校の工事を担当していた。 やる気や責任感が出て、 仕事に対する思いも 変わるだろう

新校舎の現場見学の時、本校の卒業生である今野旭君がいて、感慨深いものがあった。たくさんある建設現場の中で、母校の工事を担当していた。やる気や責任感が出て、仕事に対する思いも変わるだろう。完成した時の充実感はまた違うのではないか。就職して初めて携わる現場が母校ということはそうない。周りの方に感謝しなければならない。

私たちのライフスタイルを整えてくれているのは建設業だ。普通に生活しているが、その環境を整えてくれている。農業と同じようにキツイ、つらい、汚いイメージがあるが、ライフスタイルを変えて感動を与えてくれる仕事だ。ぜひとも建設業の悪いイメージを払拭してほしい。

（インタビューは2017年12月20日）



2011年9月から学校生活を送った仮設校舎。仮設校舎しか知らずに卒業していった生徒が5学年ある。



母校の新校舎をつくる工事を  
担当させてもらっているが、  
そのような自分を想像できなかった。  
今年4月入社の子員は私を含め5人いて、  
最初の1週間は新入社員研修を受けた。  
自分が宮城県農業高校の担当だと  
いわれた時にはうれしかった。

## 今野 旭 氏

奥田建設（仙台市）  
宮城県農業高校卒

奥田建設建築部所属。福島県生まれだが仙台市で育った。高校時代はボクシング部に所属。「元気がよく、あいさつがきちんとできる」というのが上司である高橋一郎現場所長の評価だ。「わからないことがあれば自ら質問し、早く技術力を身に付け仕事を覚えてほしい」（高橋所長）。



## 就職

東日本大震災が発生したのは中学2年の時だ。野球部だったので、校庭で部活動をしていた。中学を卒業後、宮城県農業高校に進み建築の専門学校を経て、今年4月に奥田建設に入った。仙台が好きだったので、働くなら地元の企業がよいと思っていた。就職活動をしている時に、奥田建設を見つけて説明会に参加し、地元はかなり貢献している会社だとわかった。興味を持って自分なりに調べて、面接を受けようと決めた。



高校時代を送った仮設校舎。ここでの生活が建設業を志すきっかけとなった（2017年12月）。

## 母校の新築工事

現在、母校の新校舎をつくる工事を担当させてもらっているが、そのような自分を想像できなかった。今年4月入社の子員は私を含め5人いて、最初の1週間は新入社員研修を受けた。研修の間にそれぞれの担当現場が決まり、自分が宮城県農業高校の担当だといわれた時にはうれしかった。母校の新築工事を手掛ける経験はめったにできるものではないと聞く。もし別の新入社員が担当していたら、「絶対に自分がやりたかった」と悔やんだはずだ。

私が担当しているのは、校舎棟と体育館を整備する「その2工事」だ。校舎棟を整備する「その1工事」、寄宿舎を整備する「その3工事」も同じ敷地内にある。

## 仮設校舎

建設業の仕事を意識するようになったのは、高校2年の時だ。東日本大震災の影響で校舎が使えなくなったため、宮城県農業高校では仮設校舎で授業を行っていた。小学校、中学校は普通の校舎で学び、それが当たり前だと思っていたが、仮設校舎という特別な環境で過ごすことになった。夏は暑く、冬は寒く、大雨が降れば雨漏りもする。そうした状況で過ごすうちに、「建物は環境を変えるんだ」と感じるようになった。「建物を建てて、人に喜んでもらえたらいいな」というのが、建設業を志すようになったきっかけだ。

高校時代は3年間とも仮設校舎で過ごした。（別の土地を間借りして建設した仮設校舎だったため）駐輪場が遠くにあり、歩いて10分くらいかかった。体育の授業にもバス移動が必要だった。携帯電話の電波も入りにくい場所だった。仙台から毎日、自転車で30分ほどかけて通った。



母校の新築工事の全景。同じ敷地内にいくつもの工事がある大規模現場だ（2017年8月）。

工事をしていると、「自分もこの校舎に入れたらよいのに」と思ってしまう。校舎棟には広い中庭があり、「この辺にみんなが集まり、憩いの場になるのだろうか」と想像することもある。



## 仕事

現在の仕事は、安全管理や工事写真の撮影・管理だ。朝は主に安全の確認を担当する。朝礼の司会をして、KY（危険予知）活動の確認をし、重機やクレーンによるその日の立ち入り禁止区画を周知・徹底する。落ち着いたら工事写真の撮影に入る。お昼には、職長を集めて行う連絡調整会議の司会も担当する。

建築工事の現場なので作業員の数が多い。朝礼の司会は今年5月のゴールデンウィーク明けから担当しているのだが、多い時には約100人を前に話すこともある。最初はうまく話せなかったが、先輩が司会でどういう内容をしゃべっていたかを思い出し、考えながら担当した。

下請けにはベテランの職人が多く、自分より年下は見たことがない。何かをお願いする時には、相手への



自らが担当する体育館の現場で（2017年11月）。

気遣いを忘れないようにしている。やりたくない仕事をお願いしなければならないこともある。「いわれて自分だったらどう感じるか」を常に考えるようにしている。

## 後輩

今年8月には親子現場見学会が行われ、小学生の親子や宮城県農業高校の後輩たちがきてくれた。建設現場の中に入ることはまずないはずだ。初めての光景だろうから、自分の知っている限り、現場のことを伝えたい思いがあった。見学会の後、小学生が「楽しかった」といつてくれたのでうれしかった。

宮城県農業高校の後輩とは少しだけ話をした。引率の佐藤淳先生を知っていたのであいさつをする、私を「宮城県農業高校の生徒だったんだよ」と後輩に紹介してくれた。「今、ここで働いて、母校をつくっています」と話をした。母校や後輩の役に立

## 将来

仕事はすごく面白い。図面をみて、下請けに「納まりはどうなるのか」などと聞かれ、きちんと答えることができた時には喜びを感じる。自分でわからないこともあるが、先輩に確認するなどしてうまく解決できた時には、ホッとするとともにうれしく思う。

実際に働いてみて、建設業の仕事のイメージが違った。現場の監督職員は、指揮をするだけかと思っていたが、安全管理でも工程管理でも段取りや準備をしっかりと、作業をしやすくするのが仕事だ。

将来の夢は、まだよく見えない。まずは、現状で

つことができ、ちょっとだけ誇らしく感じた。

後輩には、仮設校舎から新校舎に移ってきたとしても、「それが当たり前ではないよ」と伝えたい。震災から既に6年が経過しているが、まだ完全に復興できていない部分も多い。普通に生活し、普通に生きていることが当たり前ではない。毎日を大切にし、後悔しないようにしてほしい。



現場見学会には宮城県農業高校の後輩もきてくれた（2017年8月）。

与えられた仕事、自分ができることに本気で取り組みたい。いずれは所長として現場を持ち、人に喜んでもらえる建物を自分の手でつくりたい。

（インタビューは2017年10月26日）

# 21回 献血者に感謝する集い



宮城県建設業協会は、地域建設業として災害時などにおける迅速な復旧対応を行う一方で、献血離れが著しい社会状況の中では、道路啓開などの被災者救助の支援活動を行っても、医療に不可欠な血液製剤の安定供給がなければ命を救えない実態を深く認識し、CSR（企業の社会的責任）活動の一環として、献血活動にも力を注いでいる。多くの人員を要する建設業界ならではの社会貢献だ。

2007年11月に宮城県赤十字血液センターと「献血推進活動に関する覚書」を締結。会員企業の社員らが協力し、これまで10年間に延べ7,884人が2,444.4リットルを献血してきた。



## 献血推進活動に協力し 知事から褒状

献血に関する覚書を締結したのは宮城県建設業協会が全国で初めて。覚書では、定期献血に加え「宮城県内で災害が発生して血液が不足した場合」や「血液が不足した緊急時」に血液センターの要請に基づいて献血に協力することになっていた。2017年4月にも年度当初の血液確保に向けた緊急要請を受け、同協会本部のある宮城県建設産業会館で献血活動が行われた。業務の合間を縫って会社事務所や現場から約140人が訪れ、献血に協力した。

10年間で  
7,884人が2,444L

こうした長年の活動が評価され、2018年1月には宮城県知事から「業務行政功労者（献血功労）」として褒状を授与された。同協会では、地域の安全安心で快適な暮らしを支えるため、血液の安定供給に向けた献血活動にも引き続き協力していく考えだ。



# 女性の会がICT勉強会

ICT（情報通信技術）を活用できれば、  
建設現場は大きく変わる。  
女性の活躍の場も広がるはずだ。  
技術革新の実態はどうなっているのか。  
2017年9月8日に  
「宮城建設女性の会2015」のメンバーが  
コマツのIoTセンタ東北（大郷町）を訪れ、  
勉強会を行った。

勉強会の様子。コマツのIoTセンタも女性スタッフだけで対応してくれた。



あいさつする武山利子会長



ICT建機のデモンストレーションを室内から見学できた。



オペレーターも女性が務めた。



ICT 革命が進めば  
女性も現場に出られるし、  
安全に仕事ができる。  
女性の職域拡大になるし、  
給与面でも男性と同等になれる。  
男性社会だと思われてきた建設産業で  
女性の活用を推進していただき、  
クローズアップされてきたと感じる。

## 武山 利子 氏

宮城建設女性の会2015会長  
武山興業（石巻市）

武山興業専務。全国建設業協会の地域建設業の将来展望を策定するための専門委員も務める。東京のセミナーにパネリストとして登壇するなど、積極的に地方から中央に意見を発信している。東京都出身。



## 宮城建設女性の会

2015

宮城県建設業協会には、女性技術者の会である「リンクス」や「女性経営者の会」が存在したが、(限られたメンバーだったため)世の中の情勢に伴い活動が難しくなり、休止状態となった。新たに「宮城建設女性の会2015」を立ち上げることになり、2016年の正月明けに会長就任を要請され、「会員はどのようなのか」と聞くと、協会加入会社の女性社員すべてが会員だという。「それなら(時々のイベントや会合への)参加者の入れ替えもできるの

## ICT勉強会

9月には女性の会としてコマツのIoTセンタ東北(大郷町)を訪れ、ICT(情報通信技術)の勉強会を開いた。技術者や経営者に加え、事務職の女性もいたのだが「すごく面白かった」といつてくれた。ICT建機の試乗もあったが、事務職がああいう形でパワーショベルやブルドーザーに乗れること自体、夢のまた夢だった。当社からは総務部長の女性も参加したのだが、ICT建機に試乗してみても「車両系の建設機械の技能講習を受けに行く」と言い出した。ICT革命が進めば女性も現場に出られるし、安全に仕事ができる。女性の職域拡大になるし、給与面でも男性と同等になれる。男性社会だと思われてきた建設産業で女性の活用を推進していただき、クローズアップされてきたと感じる。

ただ、女性が働く環境はあまり変わってはいない。女性の会の会員に、自宅から1時間半をかけて建設現場に通っている女性技術者がいる。スーパーマーケットが閉まるギリギリに帰宅して、2人の子ども

## 親子現場見学会

私は、宮城県の「新・みやぎ建設産業振興プラン推進協議会」の三つの部会のうち、広報連携部会長を務めている。その関係で「みやぎ教育応援団※」にも登録していたので、親子現場見学会を開いてほしいという要請が県からきた。当社の河川災害復旧工事で、今年7月に親子現場見学会を行ったのだが、現場担当は大変

で、自由に活動できる」と思った。

今年8月に行われた小学生の「宿題・自由研究大作戦」にも、女性の会のメンバーが積極的に参加していただき、ありがたかった。宮城県建設業協会のブースは、来場者が昨年を大幅に上回る人気だった。(光るドロダンゴやペーパーウエイトをつくるワークショップのお手伝いをしたのだが)子どもたちが楽しんでもらえると、女性の会の会員も楽しいのだと思う。かつての「リンクス」や「女性経営者の会」とは活動内容も違う。親しみやすさがあり、温かく相談にも乗ってくれる。

に食事をつくっているという。掃除も洗濯もしなければならぬ。大変なのだが、大変さの中にも仕事をやり遂げた達成感があり、現場で働く女性は増えている。



(上)宮城建設女性の会のメンバーが参加したICT勉強会(2017年9月8日)。

(下)親子現場見学会の閉会のあいさつで「面白かったですか?」と問いかけると、たくさんの子どもの手が挙がった(2017年7月26日)。

※みやぎ教育応援団：個人・企業・団体等を団員として認定し、子どもの学習・体験活動の充実・活性化を図る組織。



だったと思う。普段は入れない現場に子どもたちを入れるので、どのように楽しませるか、将来につなげるかで悩んだはずだ。現場のアイデアで、堤防工事に使用する連接ブロックの重さ当てクイズなども行っ

## 若年者の入職

ついこの間まで、建設業は悪者のようにいわれてきたが、どの会社も社会保険に加入したきちんとした企業だ。建設業の仕事はつらいかもしれないが、つらくない仕事などない。私は子どもたちにも高校生にも、インターンシップ(就業体験)の大学生にも、「つらくない仕事はない

## 石巻

私は震災が起こる前、「女性経営者の会」で発行した新聞に「私の住んでいる場所には国道398号という1本道路しかありません。大地震や大津波がきたらどうしよう」と書いていた。震災で398号が寸断され3日間、支援物資も何も入ってこなかった。地方では社会インフラの整備が遅れているが、人間が人間らしくあるために最低限、災害の時に通れる道路をつくっておくのは大事なことだ。

石巻は物的、人的被害が最も多かった地域だ。立ち直ってきてはいるが、復興はまだまだだ。海に近いほど復興が進んでいない。仮設住宅を出られない人もたくさんいる。

## 公共事業予算

建設業がいなければ、災害が多い日本で国づくりはできない。震災の時に住民を助けに行ったのは自衛隊や警察、消防かもしれないが、わずかな時間で道路を啓開したのは地域を知り尽くした地域建設業者だ。だが、会社が潤っていなければ、担い手や女性の確保も、社会保険への加入もできない。公共事業予算をきちんと確保してほしい。宮城県建設業協会全員の一致団結した気持ちを国や県に届けないと、かつて(工事が抑制されていたころ)と同じことになってしまう。女性の会の会長や広報連携部会長といった役目をいただいた以上、私もいろいろなところで訴えていきたい。

(インタビューは2017年10月24日)

た。晴天にも恵まれて、子どもたちにも好評だった。身近に建設現場を見て、興味を持ってほしいと切に願う。来年度以降も親子現場見学会の話がくれば、断らない。

から、建設業は面白いよ」と伝えることにしている。一番の即戦力は工業高校生だが、少子化に伴い建設業で働くことに親が賛成しない。すると大学生の募集になるが、地元から仙台や東京に出て行ってしまう。地域建設業に若年者を入職させるのは厳しい。



(上)津波で崩壊した国道398号。武山興業が72時間で応急復旧した(2011年3月)。  
(下)宮城建設女性の会の会長として「みんなでつくる3Aの防災林」植樹式にも参加した(2017年9月)。



デモンストレーションの後、実際にICT建機に試乗してみた(2017年9月8日)。



建設現場で活躍する女性は増えている。ICT勉強会に参加した松元花歩さん(右 日広建設)もその1人だ。

# ICT建機が働く女性の未来をつなぐ

ICT勉強会では、ICT建機のデモンストレーションを見学した後、実際に試乗してみた。

建機を使って法面を施工するには4～5年の経験が必要とされる。だが、コマツの事務職の女性がICT建機を使って挑戦すると、わずか3日で施工できたという。

ICT建機が建設業で働く女性の未来をつないでくれる。



仕事は楽しいし、  
実際にやってみて女性でもできると思う。  
建設業には口が悪いとか、  
怖いといったイメージがあると思うが、  
そんなことはない。  
フレンドリーな人が多い。  
これから私もいろいろな経験をしたい

## 松元 花歩 氏

日広建設（角田市）

日広建設工事部所属。社長室長の霜山智江子さんと「日広レディース隊」として毎月、現場の安全パトロールへ出ることも。女性ならではの視点で2人に指摘されると、現場職員は素直に聞いてくれるという。角田市出身。



### 出会い

東日本大震災は中学1年の終わりだった。自分自身に大きな被害はなく、卒業して柴田農林高校（大河原町）の森林環境科に進んだ。高校3年の時に宮城県建設業協会仙南支部が企画した現場見学会があり、バスで案内してもらって3カ所の現場を見た。その時に（仙南支部長でもある）日広建設の廣谷秀男社長と出会い、「女性でも土木の現場で働くことができる」と教えてもらった。後に日広建設の求人が学校にきて、社長の言葉を思い出し、建設業の仕事をやってみようと思った。

### 仕事

入社半年目からはアスファルト舗装の平坦性試験を担当させてもらっている。下手な舗装をすると、がたがた揺れて車の乗り心地がよくない。舗装工事を行った後、国土交通省の新技術情報提供システム（NETIS）にも登録されている高度な機械（プロファイルメーター）を使って、レーザー光線でアスファルト路面の凹凸を測定し、データ分析して役所に提出する。道路の平坦性を確保して舗装工事の品質管理を行う仕事で、これまで何カ所も手掛けてきた。今年6月には現場代理人として道路舗装の補修工事を一通りやらせてもらった。初めてのことで、何もかもがわからない状態だったが、主任技術者としてベテランの先輩が付いてくれた。角田市

### 資格

社内の資格管理も担当しているので、建設業にはどういう資格があって、社員の誰がどの資格を持っているかは頭に入っている。取れる資格があれば私も取りたい。今年7月にはローラー（締固め用建設機械）の運転技能講習を受けてきた。バックホウやブルドーザーを運転するための車両系建設機械の資格も、これから取りたいと思っている。先週の日曜日には2級土木施工管理技士の学科試験を受けてきた。学科試験だけなら高校生からでも受けられるが、実地試験を受けるには建設業の実務経験が必要になる。私の場合、入社して1年半なので3年後だ。

女性が建設業で働くことについては気にしていなかった。「働いてみれば何とかなる」と思っていた。入社は2016年4月だ。最初から現場勤務を志望していた。外で動いていた方が楽しいし、現場で男性が気付かないようなことを手伝って、会社に貢献したい思いがあった。「女性として気付いたことがあればどんどんやってほしい」と社長に言われ、道路工事の片側通行規制で待たされるドライバーに少しでも和んでもらうため、「花を植えたプランターを置いたらどうか」と提案したこともある。

発注の工事だったが、無事に完成させることができた時にはやりがいを感じた。ただ、知識がなかったため、現場作業員に思ったことがいえなかった。自分の意見を伝えられるようになりたい。



（上）アスファルト舗装の平坦性試験の実施状況

（下）車両系建設機械の資格も取るつもりだ。宮城建設女性の会の勉強会ではICT建機にも試乗してみた（2017年9月）。



## 出前講座

宮城県大河原土木事務所と宮城県建設業協会仙南支部の企画で、今年8月に柴田農林高校で出前講座が行われた。母校だったので私が講師を務めることになった。依頼された時には「私でいいのかな」と思った。話をしたのは「実際に建設業に入ってこういう仕事をしている」とか、「社会人になったらこういうことが大事だ」という内容だ。聞いてくれたのは森林環境科の3年生だ。人前で話するのは初めてだったので緊張したが、真剣に聞いてくれた。

後輩には、社会に出たら何事にも責任感を持って取り組んでほしい。また、建設業に入ってみたい女の子がいるなら、男社会だと決めつけず、足を踏み入れてほしい。実は来春から、当社に後輩が入ってくる予定だ。柴田農林高校の森林環境科の後輩で、



母校の後輩に出前講座を行う松元氏（2017年8月）。提供：建設新聞社。

出前講座の時に一番前の席で私の話を聞いてくれた男子生徒だ。初めて後輩ができるのでうれしい。

## 親子現場見学会

宮城県建設業協会仙南支部では、入社5年目までの若手社員を集めて意見交換会も行っている。私も2回参加したが、若い人たちだけなので新鮮だ。私のように現場に出ている女性社員は仙南支部にいない。事務職の若手女性社員と仲良くさせてもらっている。意見交換会では、いいことや思ったことをみんなが話す。意見交換会が終わってから交流会になりボウリングを楽しむ。

今年8月には、（仮称）姥ヶ懐トンネル工事で行われた親子現場見学会にも参加した。なかなか親子で

建設現場に入れる機会はない。まだ小学5、6年生でわからないと思うが、トンネル工事を見て興味を持ってくれ、携わりたいと思う人がいれば、ぜひ、建設業に入ってほしい。



自らも参加した（仮称）姥ヶ懐トンネルでの親子現場見学会（2017年8月）。

## 将来

建設業の仕事をしてみて、入った時とはイメージが違った。仕事は楽しいし、実際にやってみて女性でもできると思う。建設業には口が悪いとか、怖いといったイメージがあると思うが、そんなことはない。フレンドリーな人が多い。

これから私もいろいろな経験をしたい。まずは2級土木施工監理技士の資格を取得して、現場でバリバリ働けたらよいなと思っている。

（インタビューは2017年10月25日）

ミッション6 役割を社会につなぐ

対談

一力雅彦氏

（河北新報社社長）

VS 千葉嘉春氏

（宮城県建設業協会会長）

震災を経験し、地域建設業にとって広報や情報発信も重要なミッションだとわかった。地域とともに復興を果たし、ともに未来へ歩いていくには、地域建設業を理解してもらう必要がある。いかに地域建設業の役割を社会につなぐかを考えた時、報道機関は欠かせないパートナーだ。河北新報社社長の一力雅彦氏と宮城県建設業協会会長の千葉嘉春氏が対談し、それぞれの立場で震災時の対応や復興に果たす役割、防災・減災への取り組みなどを語った。宮城の復興はまだ道半ばだが、次代へのチャレンジも始まっている。未来へつなぐために両者のコラボレーションはあるのか。



## テーマ1 震災時の対応と復興に果たす役割

千葉 国道については道路管理者との間で協定を結んでいて、震度5弱以上の地震が発生すれば、2時間以内に道路パトロールを行った上で状況を報告することになっている。当協会の会員企業がそれぞれ区間を担当していて、震災当日もパトロールを行った。当協会には9支部があり、沿岸部は5支部だ。津波がきた沿岸部では、早いところは震災当日の夕方から道路啓開を開始した。一方、内陸部では、宮城県との協定に基づき沿岸部へのルートの状況確認を行うとともに、橋に段差が生じたため、翌朝から土のうを使って段差解消を行うよう会員企業に徹底した。後にがれき処理も行ったが、もともとは地域住民の貴重な財産だ。遺体もある中での作業となり、地域への精神的配慮も求められた。

宮城県沖地震への懸念に加え、2008年の岩手・宮城内陸地震を教訓に会員企業との連絡体

### 一力 雅彦 氏

河北新報社社長

河北新報社編集局長、代表取締役専務などを経て、2005年から現職。仙台経済同友会代表幹事などを務め、2017年11月に日本新聞協会副会長に就任。仙台市出身。



震災翌日午前8時30分の道路啓開の様子（2011年3月12日）：仙台市若林区。

制を構築していた。規模に合わせ会社ごとに約10～20名の携帯番号と携帯メールを登録させていたため、当時も機能し連絡を取って対応できた。

一力 大混乱の中で、迅速に的確な対応をされたことに敬意を表したい。河北新報では、本社8階にある組版基本サーバーが横倒しになった。電子編集の心臓部だ。本社での紙面づくりをあきらめざるを得なかった。2010年春に新潟日報（新潟市）と「システム障害時の相互援助協定」を結んでいた。震災前月に1回目のテストを行ったばかりだったため、新潟日報にデータを送って紙面を組んでもらうことができた。新潟日報では新潟県中越地震、新潟県中越沖地震を経験し、システム障害の協定先は遠隔地の方がよいという判断で、太平洋側の河北新報と協定を

結んでいた。バックアップ体制が発揮され、新潟日報で組んだデータを当社の印刷工場に送ってもらった。印刷工場は免震構造だったので、輪転機を回すことができた。震災当日の号外と翌日の朝刊を新潟日報につくってもらった。幸い、組版基本サーバーはその日のうちに復旧し、翌日から電子組版を復活できた。

新聞発行にあたり、不足したのは水と紙、重油、ガソリンだ。輪転機を回すには大量の水が必要だ。紙は新聞用紙だ。紙を購入している日本製紙の岩沼工場が被災し、王子製紙や大王製紙の工場では港が壊れ、船で紙を運べない状況だった。重油は非常用電源の燃料だが、数日分しかなかった。ガソリンは取材するにも配達するにも必要だ。同業者から支援を受けたり、岩沼工場が早期

に復活してくれたりして、みなさんの支えで1日も欠かさず新聞発行ができた。

千葉 あれだけの震災があったのに、翌朝、河北新報の活字を見て安心した。さすがだなと思った。停電でテレビも見ることができなかったので、活字を通して状況を把握することができた。

一力 避難所にて、新聞を配達するオートバイの音を聞いただけで涙が出たという人もいた。新聞を手にとって「世の中はまだ生きている」とわかったという。大切なのは被災地に最新の正確な情報を届けることだ。沿岸部の被害が大変なところにも新聞を配った。販売店も13カ所が全壊していたが、（沿岸部から）中間地点まで新聞を取りにきて、避難所に配るという緊急時の対応をしてもらった。誤った情報はパニックを招き、二次災害を起こす危険性がある。いかに冷静に対応してもらうかが大切で、新聞の役割を果たすことができた。

千葉 復旧・復興に向けて、被災者の生活再建と生活環境の整備が求められた。スピード感を持

### 千葉 嘉春 氏

宮城県建設業協会会長

震災時には、宮城県建設業協会専務理事として震災対応に奔走し、2016年5月から現職。2016年6月からは東北建設業協会連合会会長も務める。大郷町出身。





どんなに苦しくても、被災者と共に歩む姿勢だけは守っていききたい。復興はまだ道半ばだ。心のケアも含め長期的支援が必要な人がいるし、風評被害も現実としてある。

って対応しないと、地域から人が離れていってしまう。ただ、数十年をかけ構築してきた生活基盤やライフラインがすべて破壊された。住まいを高台に移転する造成事業も入ってきたため、高台の造成工事にプラスして住まいやライフラインを構築する必要があり、時間がかかっている。国の事業はほぼ終わり、現在行われているのは自治体による高台移転や河川整備などの事業だ。個所ベースだと事業の約9割が終わっているが、金額ベースだと2017年10月末時点で完成済みは22%だ。宮城県内では約8割弱の復旧・復興事業が最盛期を迎えている。

宮城県発注の公共事業費は震災前に1,000億円強だったが、震災後は6,000億～8,000億円で推移している。人手や資材が必要だが、国土交通省が資材対策連絡会議など現場実態を把握する会議を開き、被災地特例の施工確保対策を講じてくれている。技術者やさまざまな業種の技能労働者など、従事者が不足したが、他県からきて手伝ってもらっている。宿泊経費や交通費がかかるが、被災地特例策により設計変更で必要な費用を出す仕組みをつくってもらった。

一 力 河北新報は、震災直後から被災地や被災者と「共に歩む」という基本姿勢を堅持している。「再生へ心ひとつに」というスローガンを掲げているが、日がたつにつれて新たな問題が出てくる。ていねいに拾い上げて解決策に向けていきたい。災害公営住宅は9割以上が完成した。避難所から仮設住宅、さらには災害公営住宅へと移り、(住まいの復興へ)形は整いつつあるが、数年後には高齢者だけのまちなってしまう懸念もある。

被災地では人口の流出にも歯止めが掛からない。いかに<sup>なりわい</sup>生業や生活を再建し、地域の活性化につなげるのか。地方創生にもかかわる問題であり、日本の

大きなテーマの先頭を被災地が走っている。人口が減少しても持続可能な社会、経済が循環する社会ができないか。新しい時代のモデルづくりを提言しようと、シンポジウムなどを通じて外部の意見を聞いているところだ。

どんなに苦しくても、被災者と共に歩む姿勢だけは守っていききたい。復興はまだ道半ばだ。心のケアも含め長期的支援が必要な人がいるし、風評被害も現実としてある。一つ一つ粘り強く訴えていけば、他のメディアが拡散してくれる。発信力と行動力を強化したい。

## テーマ2 地域の安全を守る

千葉 当協会では、国や自治体と災害時の対応に関す



大崎支部で行われた鳥インフルエンザ感染による防疫対応シミュレーション訓練の様相(2017年11月9日)。

災害が発生したら、発生地から円を描いて何キロ以内にどれくらいの会社と資機材があり、出動できるかが瞬時にわかるシステムを構築している。



ASP(アプリケーション・サービス・プロバイダ)サーバーに会員企業の資機材の保有状況も登録・更新している。ダンプ、バックホウなどの重機や土のう袋、ブルーシートなどの資材がどこにどれだけあるかを、会社の所在地とともに地図上に登録している。災害が発生したら、発生地から円を描いて何キロ以内にどれくらいの会社と資機材があり、出動できるかが瞬時にわかるシステムを構築している。また、このシステムは会員企業がGPS携帯で撮影した被災写真を地図上で報告することができ、その情報を管理者らも共有できる。当協会は2014年3月、県から災害基本法に基づく指定地方公共機関に指定され、これまで以上に責任を持って災害に対応しているところだ。熊本地震でも東日本大震災の教訓や知見を提供させてもらった。

一 力 地震や津波だけでなく、ゲリラ豪雨や火山噴火、竜巻などの災害が、異常気象という言葉を使えないほど日常化している。防災も日常化しなければならない。危機管理としてBCP(事業継続計画)は常に改訂しなければならない。震災の経験則があるので、よりハードルの高い災害対策を講じる必要がある。新聞社の対応としては、いかに被災地に最新の情報を伝えるかだ。災害時のウェブファーストの取り組みを強化している。紙は印刷して配るのに時間がかかるので、災害に限ってはデジタル情報を強化する。河北新報オンラインに迅速で役に立つ災害情報を載せていく。Lアラート(災害情報共有システム)などの情報も共有しながら、エリア別にきめ細かく対応する。行政とも連動しながら、可能な限り取材をして、鉄道や学校がどうなっているかなど、地元の人にリアルタイムに情報を流す。防災の日常化へ、報道機関としても役割を強めていきたい。



千葉 中央自動車道の笹子トンネルの天井崩落事故でも明らかなように、インフラの老朽化が進んでいる。被災3県では震災復興事業を急いでいるが、老朽化対策がストップしている部分もあるのではないか。橋などは完全に壊れてから直すより、事前に対応すれば費用は半分で済む。震災でインフラの重要性は理解され、国土強靱化基本法も成立した。早めに老朽化対策をやっておかないと倍のコストがかかる。

また、日本海沿岸東北自動車道(日沿道)が整備されているが、コンパクトシティとネットワークの整備が重要だ。コンパクトシティをつくれば防災・減災にもつながるし、人口減少にも対応できる。インフラ整備によってネットワークができれば、勤め先と住まいが離れていても大丈夫だ。日沿道大館北～小坂間の開通時期が公表されて以降、沿線の秋田県大館市では工場が急増し雇用が生まれ、地方税が約4割増えたという。コンパクトシティとネットワークの整備効果だ。

一 力 震災の教訓を共有しながら備えを語り合う、巡回型防災ワークショップ「むすび塾」を2012年5月に始めた。月1回のペースで各地で開催している。キーワードは「狭く、深く」。町内会単位という極めて限定した地域で、中身を深く議論する。地域によって地形も住宅事情も異なる。同じ避難訓練をして「30分以内に高台に逃げろ」となっても、ある地域では保育園も参加して、0～3歳児は乳母車に乗せて、4～5歳児は自分で走って逃げる。介護が必要な人がいれば、何人いるかを事前登録して車を使えるようする。寝たきりでベッドごと運ばなければならない人がいれば、何人いるかを把握するといったように、実際に備えて避難訓練をする。訓練をすると、具体的な対応が各地で浮かんてくる。毎月、新聞紙面でも紹介している。

また、震災の経験を語ってくれる方が、時がたつ



河北新報社の「むすび塾」で震災の教訓を伝える「女川いのちの石碑」を見学する参加者(2017年12月):女川町。提供:河北新報社

につれ年をとっていく。若い語り部をつくろうと、大学生らを対象に「次世代塾」を2017年から始めた。被災地に行って語り部の話を聞き、教訓を伝える担い手の育成に取り組んでいる。

千葉 建設業でも担い手の確保が厳しい状況だ。建設業に対する一般の正しい理解を促進するためにも、河北新報に協力してほしい。建設業の就業人口の3分の1が55歳以上で、29歳以下は1割だ。国も「新たな3K(給料、休暇、希望)」を掲げ、希望の持てる建設業を目指しているところだ。

### テーマ3 次代へのチャレンジと地域貢献

千葉 若い人にも魅力ある産業だと伝えられるよう、建

設業界は「i-Construction<sup>※</sup>」にも取り組んでいる。3D図面を建機にデータ入力し、熟練工でなくても正確な施工ができる取り組みだ。測量もドローンを使って行い、完成すればドローンを使って成果をまとめる。建設業は屋外作業であっても、ICT(情報通信技術)、IoT(モノのインターネット)、AI(人工知能)の活用が進み、大幅に変わってきている。

一 力 小中学生にはNIE(Newspaper in Education)活動を展開し、出前授業で新聞の読み方、書き方、つくり方を説明する場を設けている。出前授業をした学校では、投書を書いたり、文字を読む機会が増えたりして、読解力の向上につながっている。間もなく学習指導要領も変わるため、教育における新聞の利活用があらためて強化されてきている。高校生や大学生にも紙

面で考える機会を提供したい。子育て世代にも、ともに地域の問題を考えようという企画がある。新聞を通じて、そうした場づくりをしたい。

震災の風化の防止に向け、被災地にきて理解を深めてもらう活動も続けたい。ツール・ド・東北という自転車のイベントもそこから始まり、全国からライダーがきてくれるようになった。地元の方にも(食べ物や飲み物を提供する)エイドステーションで参加してもらっている。民泊をした人が田植えや稲刈りにしてくれるなど、さまざまな交流も芽生えている。

当社は120周年を迎え、新聞の可能性を広げる新たな挑戦も始まっている。接点の少なかった若い世代にも近づいていって、新聞に対する親近感を醸成する。復興から成長へとギアチェンジをしなければならない時期なので、みんなでアイデアを出し合い、形にできればいい。人と人、地域と地域を結ぶ力を強化したい。宮城県建設業協会にも、復興から成長へと向かう中、ハード・ソフト両面で貢献してほしい。地域に密着した強みを生かし、当社といろいろなコラボレーションができればいい。

千葉 地域建設業として、災害時などには地域の「町医者」的な役割もある。大掛かりなまちづくりなどのプロジェクトはスーパーゼネコンが行うが、地域での仕事は地域とともに歩む地域建設業が地域密着型で行う。震災時には遺体の埋葬までやったが、できるのは地域建設業だけだ。「町医者」として各地域にいないといけない。河北新報にも協力をお願いしながら、地域建設業に対する正しい理解を広めていきたい。

(対談は2017年12月21日)

.....  
※i-Construction: ICT(情報通信技術)などを建設現場に導入することで、建設生産システム全体の生産性向上を図り、魅力ある建設現場を目指す取り組み。



復興から成長へと  
ギアチェンジをしなければならない時期なので、  
みんなでアイデアを出し合い、  
形にできればいい。  
人と人、地域と地域を結ぶ力を強化したい。



震災時には遺体の埋葬までやったが、  
できるのは地域建設業だけだ。  
「町医者」として各地域にいないといけない。  
河北新報にも協力をお願いしながら、  
地域建設業に対する正しい理解を広めていきたい。



あの日から、

ようやくここまでできた。

つらいことも悲しいことも

地域に寄り添い乗り越え、

まちを直してきた。

ほかにできるやつはいない。

寸断された道路をつなぎ、

壊れた堤防の高さを整え、

土地を何メートルもかさ上げして、

被災者の住まいをつくった。

少しずつ、

地域は笑顔を取り戻した。

とはいえ、復興はまだ道半ばだ。

二度とあのような被害があってはならない。

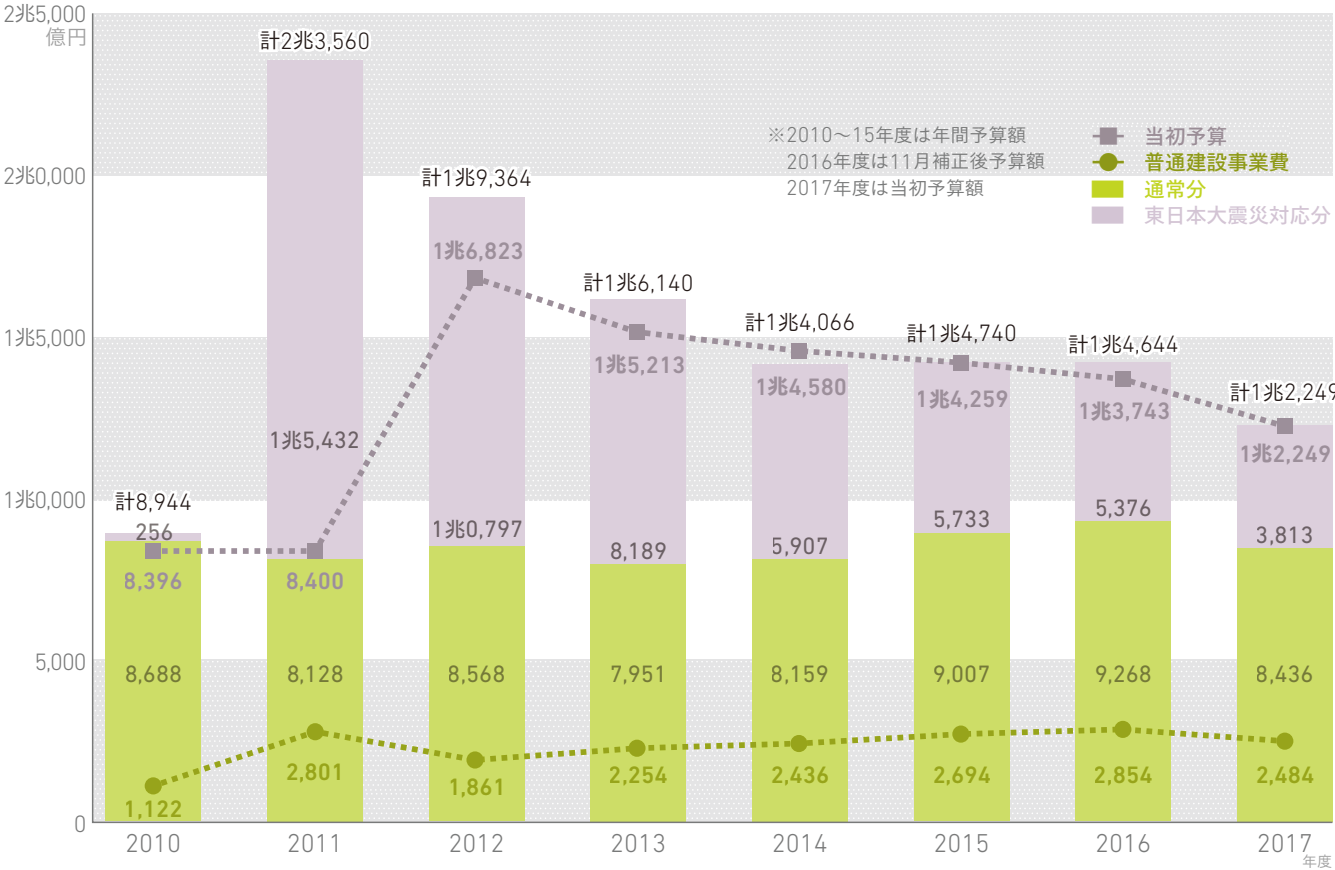
未来をつなぐ「地域の町医者」として、

俺たちの仕事が終わることはない。

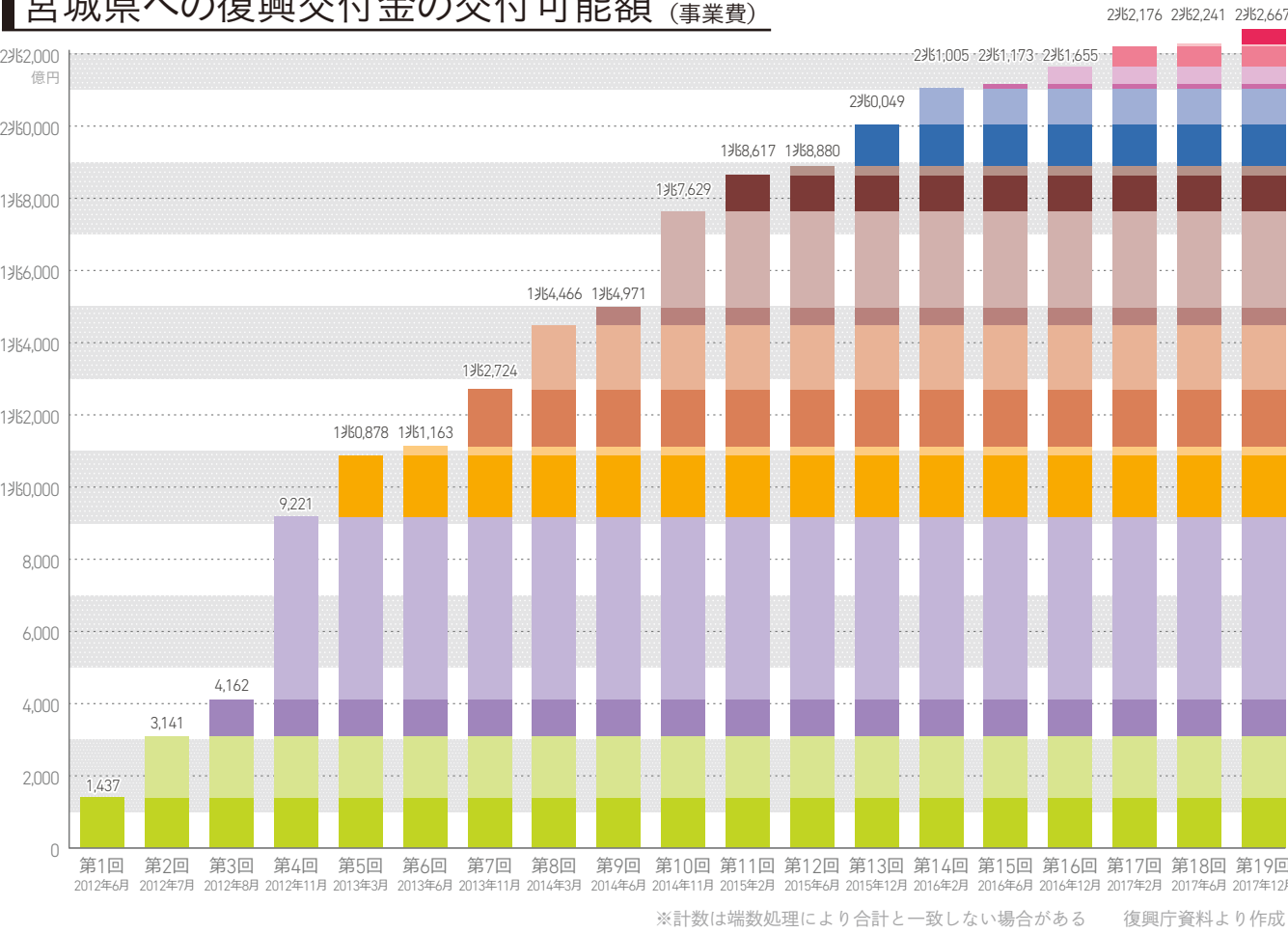




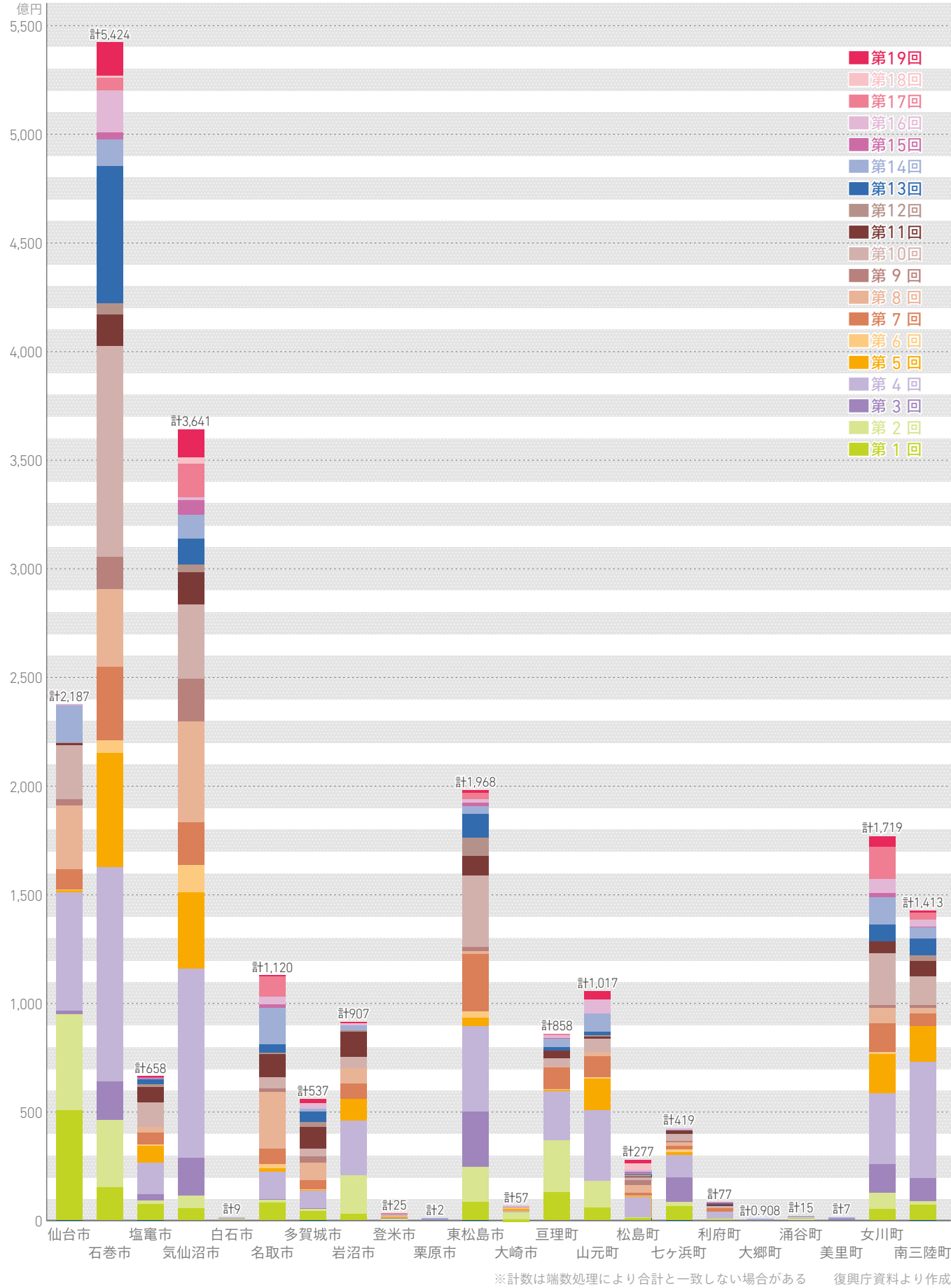
宮城県の子算額の推移（一般会計）



宮城県への復興交付金の交付可能額（事業費）



宮城県内自治体への復興交付金の交付可能額（事業費）



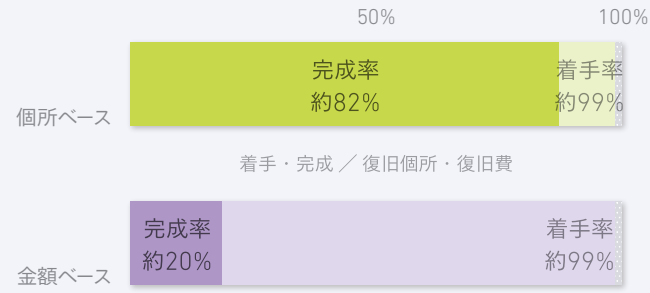


公共土木施設の復旧工事の進捗状況（宮城県事業 2017年10月末現在）

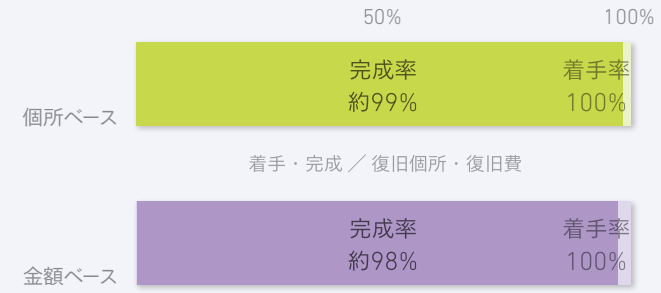
1. 公共土木施設（道路、橋梁、河川、海岸、砂防、下水道、港湾、公園）



2. 沿岸部



3. 内陸部



4. 道路・橋梁施設（復旧工事）



5. 河川施設（復旧工事）



6. 海岸保全施設（復旧工事）



7. 砂防・地滑・急傾斜施設（復旧工事）



8. 下水道施設（復旧工事）



9. 港湾施設（復旧工事）







## 未来をつなぐ地域建設業 3.11 東日本大震災 宮城県建設業協会の闘い 6

平成30(2018)年3月

発行 一般社団法人 宮城県建設業協会  
〒980-0824  
仙台市青葉区支倉町2番48号  
宮城県建設産業会館6階  
電話 022-262-2211 FAX 022-263-7059  
E-mail [jigyo@miyakenkyo.or.jp](mailto:jigyo@miyakenkyo.or.jp)  
URL <http://www.miyakenkyo.or.jp>

編集・制作 日刊建設工業新聞社

写真協力 水本 圭亮

印刷 平河工業社





一般社団法人 宮城県建設業協会